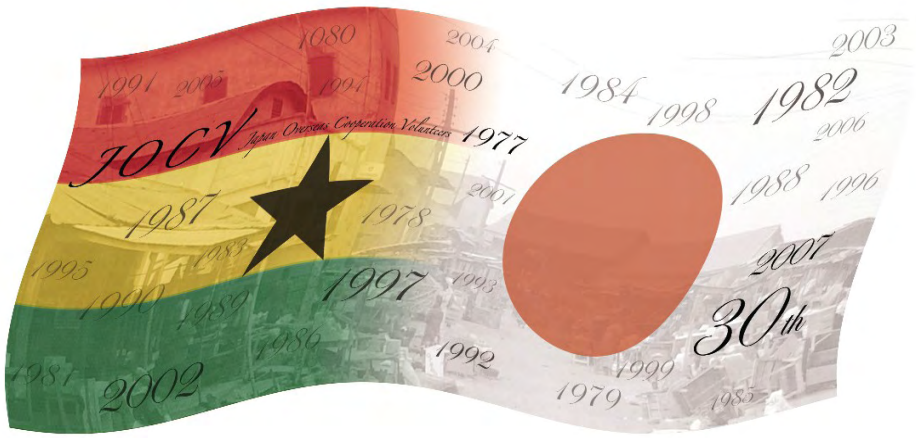
ガーナ共和国青年海外協力隊事業30周年

記念文集

「ガーナで見つけた小さな幸せ」

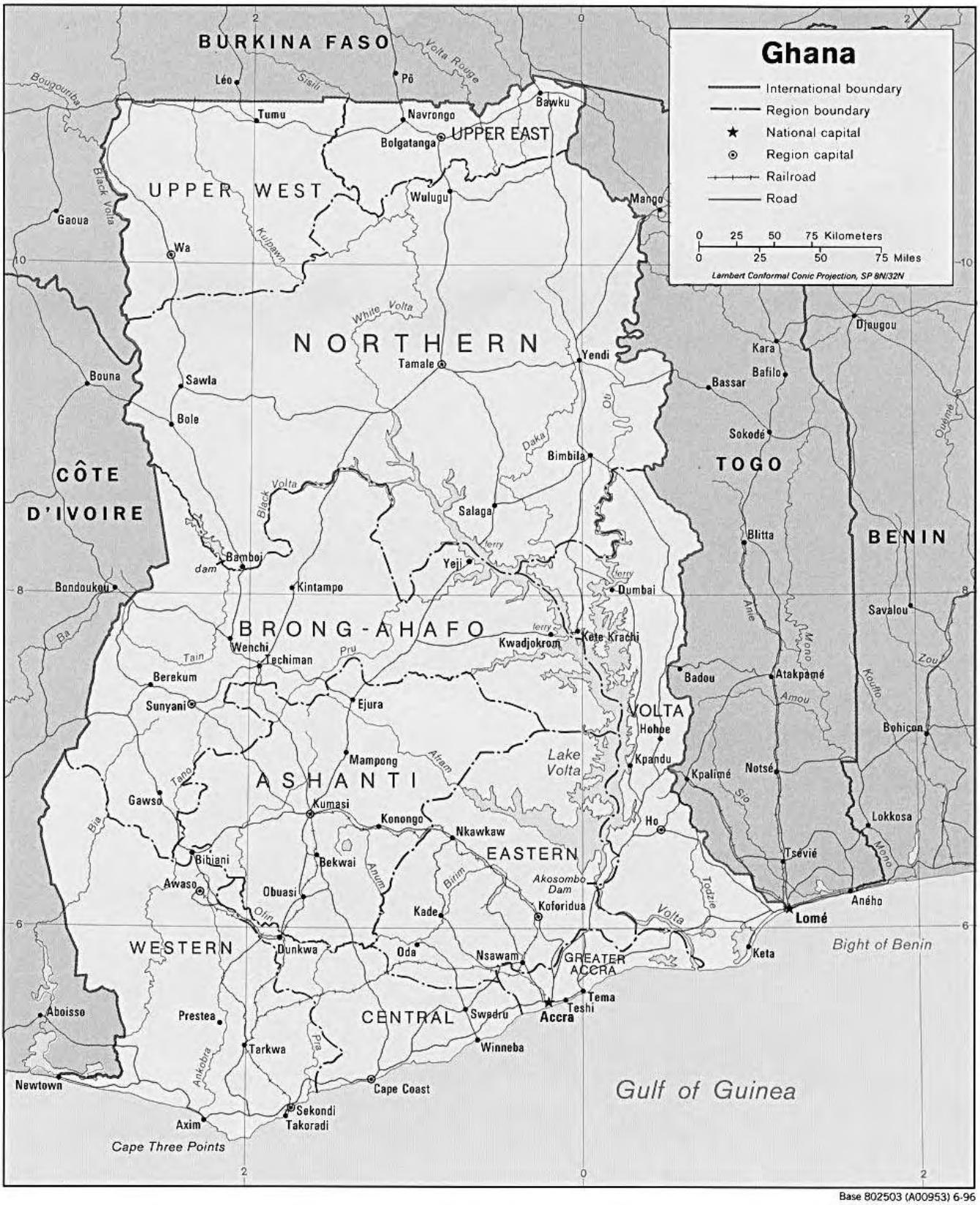
「ガーナで見つけた小さな幸せ」



平成 18 年度2次隊　沢目文雄隊員　作

-JICAガーナ事務所-

December 2007



Base 802503 (A00953) 6-96

参考:ガーナ共和国地図

目次

30 周年記念文集を作成するにあたり……1

Welcome back to Africa！！……2

「いつか帰れるところ」 氏家幸一【H17-1】……3
「幸せな思い出」 松原孝和【H15-2】……4
「僕はガーナにいる！！」 茂野交市【H19-2】……5
「人間の営みの中にこそ」 伊藤妙【H18-3】……6
「人間の生きている証とは？」 相馬敬【H2-1】……7
「ガーナで見つけた幸せって。。。」 荒岡仁実【H16-3】……8
「30年前のガーナの生活」 塹江まほ(旧姓:山崎)【S53-1】……9
「誰が教えてくれる？」 山元理紗子【H17-3】……11

ガーナの人たちへ、ありがとう！！……13

「遡れば 18 年前」 山本直也【H1-2】……14
「生徒たちの夢と努力」 木村健太【H13-3】……15
「所長の一言」 梅沢康【S54-3】……16
「Flash」 川本清隆【H17-9/H18-9】……17
「教え子」 鈴木良和【H9-1】……18
「ガーナでお世話になった人たちへ」 小林論子【H16-1】……19
「アヨヨばあちゃん」 高木香苗【H17-3】……21
「心が通じた瞬間！！」 吉田倫子【H17-3】……22
「夕食会」 宮本佐知子【H18-2】……22
「笑顔で挨拶！！」 小野麻里【H18-3】……23
「心配かけてごめんね」 佐藤里香【H18-3】……23
「分かち合い」 五十嵐謙一【H18-3】……24
「わたしの隣人」 須藤崇【H18-3】……25
「自分が忘れかけていたもの」 石田裕一【H17-2】……26
「ガーナのいいところ、わるいところ」 野底勧【H16-2】……27
「胸いっぱいの幸せ」 大釜正希【H17-2】……28

理想の国とは？……30

「教師の礎」 山崎丈【H2-1】……31
「ホームステイの思い出」 川原章裕【H16-1】……32
「助け合い」 渡部和江【H15-1】……33
「特別な方からの特別な贈り物」 永田耕作
【シニア海外ボランティア H17-前期】……34
「ありがとう」 土井ゆり子【H9-1】……35
「挨拶」 高谷弘枝【19-2】……36
「楽しく過ごそう」 加賀雅子【H19-2】……36
「至福のひととき」 加藤雅春【H13-2】……37
「ピアス」 橋本麻衣子【H17-2】……39
「ガーナで気づいた大切なこと」 山田綾佳【H17-3】……40
「ガーナにとっての発展とは？」 佐藤昭則【H15-2】……41
「ガーナ人の優しさ」 泉山純子【S58-1】……43
「静かで穏やかな気分」 奥村建樹【18-1A】……44
「ガーナで見つけた幸せ IN とろとろ」 佐藤育子【H17-2】……45

目次

水と電気……46

「ガーナに来て」 南雲達也【H8-1】……47
「停電の中での優しい灯り」 山口祐佳里【H17-3】……48
「上を向いて歩こうよ」 丸山弥津枝【19-2】……48
「ライト・オフ(停電)」 坂田武範【H18-3】……49
「はじめて気づく日常のありがたみ」 塩澤知子【H18-3】……50
「スター・ライト」 仁科ゆかり【H18-3 】……50
「停電と ipod」 小路隆之【H18-3】……51
「停電と思いきや。。。」 佐藤久卓【H18-3】……51
「辛い日々を乗り越え・・・」 池田航【H18-3】……52

千人千色……53

「ガーナで授かった宝物： 3＋1」 丹みゆき【H8-9】……54
「自由:協力隊員への課題」 井上善之【H18-1A】……55
「ありがとうって手話で言える？」 齋藤あい【H18-3】……56
「おいしい料理を召し上がれ」 堀真也【H18-3】……56
「言葉が通じることの意味」 末廣そのみ【H18-3】……57
「日々の健康」 安倍伸【H18-1B】……57
「ゴミ、ゴミ、ゴミ」 伊藤國廣
【シニア海外ボランティア 18-後期】……58
「わたしが幸せを感じるとき」 尾上淳子【H18-2】……59
「THe door of No Return」 瀬戸口暢浩【H3-1】……60
「日々の生活で見つけた小さな幸せ」 丸山吏乃【H18-3】……61
「仕事(活動)帰りに飲むビール」 土屋幸子【H17-2】……61
「幸せな瞬間」 浅野芙美子【H19-2】……62
「ガーナで見つけた小さな幸せ」 桂智佳子【H19-2】……62
「ガーナに感謝」 匿名希望……63
「足？！」 宮田麻理絵【H19-2】……64
「蛍の光りの下で、すやすや…」 加藤貴夫【H18-1A】……64
「2 つの星」 井上善之【H18-1A】……65
「ガーナまで届いているよ！！」 匿名希望【18-2】……67
「日常から生まれる私の幸せ」 今岡舞【H19-2】……68
「いろいろあるけど。。。」 新本真代【H19-2】……68

－ 特別寄稿編 －……69

「ガーナ協力隊派遣 30 年に思うこと」 金子洋三【青年海外協力協会（JOCA）会長・元協力隊ガーナ調整員（S57 年3月～60 年 1 月）】……69
「本部で、そしてガーナで感じたこと」 野吾奈穂子 【JICA青年海外協力隊事務局 海外第二グループアフリカチーム】……70

－ 事務所関係編 －……72

「ガーナで見つけた小さな幸せ」 村上博 【JICA ガーナ事務所長】……72
「30 年の重み」 熊谷真人【JICAガーナ事務所次長】……73
「ボランティア調整員の幸せ」 鷲見美由紀 【JICAガーナ事務所 ボランティア調整員】……74
「素直に思うコト」 木村真樹子 【JICAガーナ事務所 広報エージェント】……75
「1000 人のサポーター」 工藤美穂 【JICAガーナ事務所 広報エージェント】……75

「30 周年記念文集あとがき」……76

「ガーナ国協力隊事業の概要（青年海外協力隊20世紀の奇跡より引用）」……77

30周年記念文集を作成するにあたり

ガーナ共和国青年海外協力隊事業が、今年で30周年を迎えました。そして、来年には累計派遣隊員数が1000名を超えることが期待されます。

本来であれば、過去を振り返り、これまで派遣された隊員の活動の成果をまとめ、これからの隊員活動へ反映させるような内容の記念文集を作成するのが筋かと思われますが、今回は主眼を変え、30年という歳月をかけ、また、1000人近くの隊員を派遣してきた国で活動してきた(している)隊員達から、「ガーナで見つけた小さな幸せ」というテーマで原稿を募集することにいたしました。

集めた原稿を読むと、協力隊経験者にはとても共感できる内容であり、また、協力隊の未経験者の方にも興味のある内容の文集となりました。ガーナでの生活の中で得た経験・体験は、バックパッカーの旅行とは違い、根を伸ばし、枝葉がついたものです。この文集を竹で編んだかごに見立てて、その枝葉から生まれた果実を集めてみました。じっくりとご賞味ください。

国際協力の最前線で現地の人と共に活動している隊員が、日々の生活から感じたことや気づいたことをストレートに、また、個性豊かに、文章を綴っています。この文集を開けば、そこにはアフリカの大地がひろがります。そして、ページをめくれば、ガーナの海岸に吹き寄せる潮風やマーケットの喧騒を感じることができるでしょう。昨今、日本人に元気がないと言われていますが、この文集を読めば、何故か心も弾むことかと思います。アフリカ人の生き様と、日本青年の逞しさを、とくとご覧ください。

今後とも、ガーナ共和国青年海外協力隊事業に対してのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

平成 19 年 12 月
JICA ガーナ事務所
青年海外協力隊事業
30 周年記念文集制作チーム

Welcome back to Africa！ ！

誰でも心の故郷がある。思い出の場所や心安らぐ場所。そこは、もしかしたら、生前に住んでいた場所なのかもしれない。協力隊の活動を行う中で、幸運にも、そのような場所を見つけた者たちがいる。ガーナが故郷と言い切れるほど、ガーナを好きでやまない者たちだ。そして、彼ら（彼女ら）は、その土地から離れれば、離れるほどガーナへの思いが強くなっていくようである。

案外、隊員経験者のほとんどが同じ思いを抱くのかもしれない。「アフリカの水を飲んだものは、アフリカに戻ってくる」とは、良く聞く話だが、現地の人とともに住・食を共にしたものにとっては、「アフリカの飯を、アフリカ人と食ったものは、アフリカに帰化する」と言っても良いのではないだろうか。現地の言葉を駆使しながら笑いをとりつつ、一つの皿にあるものを、手で食べることは、日本で言うところの、「同じ釜の飯を食う」に通じるのではないだろうか。

飛躍するかもしれないが、隊員でアフリカに派遣された者は、運命的にも生前はアフリカ人だったのかもしれない。数ある人生の中、どういう訳か、アフリカのために派遣されたこと自体、確率的にも運命的なものを感じないだろうか。

ガーナの空港に降り立った瞬間、ムンとした熱気と共に、「ウェルカム　バック」と耳元で聞こえたのは私だけではないはずだ。隊員 OB/OG には、「オレ（私）の第2の故郷はアフリカだ！」と、これからも声高に言って欲しい。そして、日本在住のアフリカ人として、アフリカのリアルな現状を伝えて欲しい。

ガーナに思いを馳せる8名の方からの、「ガーナで見つけた小さな幸せ」を、あなたの元へ届けよう。

「いつか帰れるところ」

平成17年度1次隊　氏家幸一
職種：理数科教師　任地：ウェスタン州シャマ

『いつか帰れるところ』。それを見つけられたことが収穫だった。

2004 年 6 月、私は協力隊の春募集を受験した。動機はいくつかあるが、そのうちの一つに「海外生活への興味」がある。とにかく日本を離れて外国に住み、しかも長期間の生活をしてみたかったのだ。生活するということに重きを置いていたので、よく皆が言う「語学を伸ばす」云々は、私にとって二の次。そして、どうせなら未知のアフリカへ。それから約 1 年後、希望どおりガーナへやってきた。

空港を出て最初の印象は「黒い！」だった。日本とは全てが違う世界がそこにあった。唯一同じなのは、服を着て二足歩行する人間というものの存在・・・それぐらいに思った。ガーナに来るまで、アフリカどころか海外旅行の経験もなかったので尚更だった。だから、当初はアクラ[1]の繁華街を歩くのが怖かった。そうは言っても、割と楽観主義なので悲観することはなかった。だが、人並に「本当に一人で生きていけるのかな」「ガーナ人とうまくやっていけるだろうか」と思うことはあった。

イメージ写真：アクラの中心街OSU

ところがどうだ。実際に任地へ赴きそこの社会の中に入って生活することは、苦労こそすれ不可能ではなかった。昔の人の言うとおり、住めば都だったのだ。外国を何も知らなかった私にとって、住むところと言えば日本だけであり、さらに言えば自分の行動範囲だけが住んでいる場所だと思っていたことに気付いた。

そして日本に戻って、改めて考えてみた。「日本とは？」。それは、モノがあって言葉が分かるからこそ自分でなんとかしようとしてしまう世界。「ガーナとは？」。それは、右も左も分からず四苦八苦するからこそ他の人に助けを求めて生きようとする世界。それを可能にしているのがガーナ人の人懐っこさ、ホスピタリティ、温かさ、ぬくもり等々。

いじめを苦にしての自殺、嫌いだからと斧で子が親を殺す日本社会。私が思うに、それは日本という国しか居場所がないと思い込んでいる証拠だ。でも海の外を見ればいいと思う。居られる場所は無数にある。全てを投げ出して新天地へという行動は、社会人としては良く思われない。しかし、一人の人間の生きる方策・術（すべ）として見た場合、それも悪くない。いざとなったら帰ることのできる場所がある。彼らにとっては物珍しいオブロニ[2]へのお節介だったりちょっかいかもしれないが、確実に言えるのは「彼らは受け入れてくれる」ということ。

そう思えたことが「ガーナで見つけた幸せ」。

[1] ガーナの首都
[2] チュイ語で白人、外人の意味

「幸せな思い出」

平成15年度2次隊　松原孝和
職種：理数科教師　任地：ノーザン州ダマンゴ

生徒がよく理解してくれた時。生徒が自力で数学の問題を解けたとき。同僚とのおしゃべり。ヤギとのにらめっこ。小さい子供達からのオブロニ攻撃[3]。仕事が終わってから、冷やしたピュアウォーター[4]で作ったアイスコーヒーを飲む時。仕事が終わってから町でコーラやファンタを飲む時。乾季の雨。協力隊のみんなとアクラで集まった時。ガーナで見つけた幸せといえばこんなものだろう。（果たして本当にこれだけだったか？）

日本にいる時とたいして変わらない。仕事がうまくいった時。おいしいものを食べた時。同僚とのおしゃべり。仕事後の一杯。懐かしい仲間と会った時。

たいして昔のことでもないのに、もうすでにガーナでの出来事や思い出がぼやけ始めている。（本当にガーナに 2 年間もいたのだろうか？）とすら思う。証拠がなければ自分自身で疑ってしまう。証人（隊員の仲間達）がいなければ信じることができないだろう。ガーナで見つけた幸せも忘れ始めているのかもしれない。

イメージ写真：Abiriw にある小学校（青空の下で、みんな元気に勉強しています）

ただ、ガーナを離れてから、以前にも増してガーナを恋しく思う。僕は幸せだ。

[3] “オブロニ（白人）”と声を執拗に掛けられること
[4] 袋に入った蒸留水

「僕はガーナにいる！！」

平成19年度2次隊　茂野交市
職種: 理数科教師　任地:ボルタ州アクロポン

5年前に自分が外国で生活、ましてやアフリカのガーナで生活するとは夢にも思わなかった。まだ私はここガーナにきて 2 週間しかたっていないので、これからたくさんの幸せを見つけていけたらと思う。しかしながらこうやってガーナに来るチャンスを得て、慣れないながらも元気で生活している自分はすでに幸せ者だ。ガーナで現地の人々とたくさんコミュニケーションをとり、思考の幅を広げることが、今後のさらなる幸せにつながると思っている。

Kofi[5] Koley

イメージ写真：ガーナのお祭りの様子（ケープコーストにて）

[5] 金曜日生まれの男子につけられる名前。ガーナでは生まれた曜日ごとに名前が決められる習慣がある。Koley は、“こういち”と似た発音のガーナ人の名前。

「人間の営みの中にこそ」

平成18年度3次隊　伊藤妙
職種：エイズ対策　任地：アシャンテ州マンポン

写真：料理をしているところ（伊藤隊員より）

シャー、シャー。ヤシの枝を集めて縛ったほうきで外を掃く音。美しい鳥のさえずり。ガーナの朝は早い。水汲みに出ると「マーチヨー！」（おはよう！）近所の子供たちが水汲み場に集まっている。トーン、トーン。どこからともなく響いてくるフフを搗く音。（フフ：山芋などが原料で、ガーナで特に好まれる主食。作り方も食感もまるで餅のよう。写真参照）食事作りのための炭や薪を焚く香り、近所の子供たちの笑い声や泣き声、放し飼いのヤギの鳴く声、教会から聞こえる音楽・・・。特別なことではなく、そんな何気ない日常の風景、音、香りに幸せを感じています。

ここガーナには、人間の営みを実感できる風景が当たり前にあります。日本でも、父親の子ども時代には多く見られたであろう、懐かしの風景なのではないでしょうか？食事作りから、食べるのも、洗濯、ミシンがけ、歯磨き、おしゃべり、子供の水浴び、石鹸作りまで、なんでも屋外でやる習慣があることも手伝ってでしょうか?まるで一昔前にタイムトリップしたかのようです。

外を歩けば、どこからともなく子供たちの声。「オブロニ、マーチン、ハーワーユー？」（白人さん、こんにちは。お元気ですか？）大きな目をした子供たちがこちらに手を振り、決まり文句でご挨拶。とにかく子供が多く、年長の子が小さい子の面倒をよく見ます。子供の遊びも手作りがほとんど。サトウキビの茎で作った横笛やピストル、トウモロコシの皮でヘアーサロンごっこ、自転車の車輪を棒で転がすなど、工夫が見られます。食事作りから水汲み、掃除まで子供たちは朝から夕方までよく手伝います。よく遊びよく働く子供たちは、子供らしく元気いっぱいです。

写真：頭に食べ物を載せる女性（伊藤隊員より）

また、頭になんでも乗せて歩く人々が挨拶しながら行き交っていきます。何を乗せているのか興味津々。時には、きれいに並べられた牛の足が頭からニョキニョキ生えているように見えて、ギョッとすることも！どんなものでも、見事なバランスで乗せて歩く姿は必見です。

写真：ガーナの子供たち（伊藤隊員より）

道の側ではヤギや羊が草を食んで、その子羊たちのかわいらしさと言ったら！動物たちはいつも楽しい気分にさせてくれる、愉快な仲間たち。洗濯物を干しているそばを、りっぱな雄鶏が数匹の雌鳥を率いて颯爽と歩いて行きます。そこには人間とはまた違う時間の流れがあって、そんな風に生活の中にいつも動物がいると、人間もこの自然界の一部だったんだと思い出させてくれます。

こんなガーナの日常風景、そこには、躍動感溢れるそれぞれの命が、厳しい状況の中でも生き生きと明るく生き、人間の底力やたくましさをふんだんに含みながら、常に私にエネルギーを与えてくれるものです。

「人間の生きている証とは？」

平成2年度 1 次隊　相馬敬
職種：理数科教師　任地：ノーザン州イェンディ

子供の頃、私はウルトラマンが大好きで、大きくなったらウルトラ警備隊の隊員になるんだと考えていました。ウルトラマンになるには光の国の宇宙人じゃないといけないし、何といってもたった一人で地球の平和を守らなければならないのは責任が大きすぎて、子供ながらに無理だと思っていました。その後、憧れのサンダーバード 2 号と出会い、国際救助隊の隊員になりたいと思うようになりました。しかし、国や宗教の違いを超えて地球の平和を守るという国際救助隊もトレーシー一家の一員じゃないと入れないことが分かり挫折しました。

そんな私が大きくなって出会ったものは青年海外協力隊でした。また「隊」がついていました。そして 1990 年に青年海外協力隊員としてガーナに来たのです。当時はローリングスを議長とする PNDC 政権の真最中で、政治的な発言は許されない恐怖政治に似た状況でした。官営のスーパーマーケットには空っぽの棚だけが並び、日用品の買出しには苦労しました。床が抜けていて地面が見えるタクシーも当たり前でした。

任地は北部州のイェンディでした。田舎の生活は苦労も多かったですが、貧しいながらも底抜けに明るい周りのガーナ人に助けられて何とか 3 年の任期を終えることが出来ました。その間、92 年には憲法批准の国民投票があり、その年の暮れにローリングスが選挙で大統領になり、ガーナは軍政から民政移管するなど劇的な変化がありましたが、私の仕事はと言えばボチボチでした。

イメージ写真：マーケットで魚を売っている女性（アクラにて）

ところでガーナで見つけた幸せとは何でしょうね？キザだけど「人間の優しさが、人間の生きている証」なのかな～と考えさせてもらったことでしょうか。面倒なことも多いけど、結局いろんな人と関わっていくことが生きていくってことなんでしょうね。そんなことを教えてくれたガーナ人と出会えたこと、自分を成長させてくれたガーナと出会えたこと、そんなのが幸せというのかな？と、今この文章を書きながら思い至りました。やっと子供の頃からの夢だった、地球の平和を守る活動の末席にたどり着けたのかもしれません。

「ガーナで見つけた幸せって。。。」

平成16年度3次隊　荒岡仁実
職種：感染症対策　任地：ノーザン州トロン

- 任地で 500 セディのシルバ（とダバニ語では言った。ドーナツ？？）をひとつ毎日おやつに買っていたら、おまけでもうひとつ、おばさんがいつも付けてくれたとき。（そして倍になる）
- ポンプ式の井戸で水汲みをして、容器をバイクの後ろに気合で（しかしふらふらして）乗せていたら、通りかかったガーナ人に自転車をほってまで駆け寄って手伝ってもらったとき。同じく水汲みで、女の子たちが何も言わずに暑い中、軽やかにジャンプしながらポンプを手伝ってくれたとき。すごく軽やかで見とれてしまった。
- タマレで週末にオレンジをまとめて同じお店で買っていたのだけど、ある日「この前、お釣りを間違ったから」と言って、私は覚えていないのに 2000 セディ返してくれたとき。
- ほぼ毎日、お昼に食べていたフライドヤム[6]を何も言わなくても 1500 セディ分、渡してもらえるようになったとき。
- バイクで奥の村へ向かう、本当に何も無いただひたすらまっすぐな道で、たまに向こうからやってくるバイクに乗るガーナ人とすれ違いざまに挨拶するとき。

私が「ガーナで見つけた幸せ」は、ささやかな喜びが積み重なったものです。その中で共通しているのは、ガーナの人たちが私をそこに住んでいる者として自然に受け入れてくれたことに対する喜びです。

私はここで生きているんだなぁ。サバンナの大地の上でその感情があるときはふつふつと、あるときは突如と湧いてきました。日本からはすごく遠いアフリカなんだけれど、そのガーナで生きていること、普通に自然にそこにいてそして私が私でいること。むしろ生かされているのかもしれない。それって幸せなことかもしれないなぁ。日本では持たなかったそんな気持ちになりました。それは私のガーナで見つけた幸せです。

写真：青空散髪屋さんでカットする、ちょっとふくれっ面の子供。トロンのみんな元気かなぁ。
（荒岡隊員 OG より）

[6] ヤム芋を揚げたもの

「30年前のガーナの生活」

昭和53年度1次隊　塹江まほ(旧姓：山崎)
職種：理数科教師　任地：ウェスタン州アジィム

私が、ガーナにいたのは、昭和53年8月から昭和55年7月。ガーナへのJOCV[7]派遣が始まった2年目（昭和53年）に赴任しました。ガーナにいた2年間は、本当に濃縮された経験だったと30年近く経過して、今　あらためて思います。

当時経済状態が良くなかったので、多くの品物は闇市場へ。アクラのスーパーマーケットへ行っても　棚にあるのは灰皿とベーキングパウダーのみ。ベーキングパウダーは売っていても、小麦粉はありません！！！　現在のガーナは、物資が豊富ですので、今の隊員の方々は想像できないかもしれませんね。

ガーナ人も外国人も全員平等に大変な生活をしていました。私と同年代のガーナの方とお話しする時の話題は、「お互い苦労したよね。」
当然のことながら、私の住んでいたAXIMでは、電気はつかず、ランプ生活。水は、幸運にも毎朝1時間蛇口から出ました。（1週間ほどでないことも　時にはありましたが。）

30年前でしたが、当時の日本の生活からは、想像もできない生活であったことは確かです。でも、真夜中にサバンナのど真ん中で車が故障しても、どこからかガーナの人達が来てくれて、なけなしの食料でもてなし、宿を提供してくれる本当に皆で助け合うなんともほのぼのとした環境でした。

イメージ写真：地方の道路

イメージ写真：アクラの中心街

その時の日記を開くと、本当におもしろいし、なつかしく　今でも夢中になって読んでしまいます。なんということのない日常のこまごましたできごと、セカンダリースクールの生徒達、AXIMの町のことなどを書いているのですが、・・・その当時のガーナの匂いまで感じます。

[7] Japan Overseas Cooperation Volunteers の略

今　本当に良かったと思うことは、ガーナ・JOCVがとぎれることなく継続されていることです。平和が守られなかったら決してできないこと。これが、ガーナで見つけた幸せかな。

こんな、ガーナを是非娘と旅行したくて、大学生の娘とガーナを旅行しました。彼女いわく、「どうして　私の初めての外国が、ガーナ？？？」と言いながら、到着したコトカ空港で、入国管理官から「僕のガールフレンドにならない？」という挨拶を受けました。当然　ガーナが大好き。

P. S. 私は、帰国後は、高知県で農業改良普及員になりました。それは、日本では体験したことのなかった「食料が十分手にはいらない。」という経験が大きかったと思っています。

イメージ写真：ガーナのキオスク

「誰が教えてくれる？」

平成17年度3次隊　山元理紗子
職種:　村落開発普及員　任地:アッパーウエスト州ナドゥリ

お天気お姉さんが「そろそろ春ですね」と言った。お中元のコマーシャルが増え、初夏を迎えた。いつものあのカルピスが美味しそう。“〇〇の秋”と言う話題が巷に溢れた。山下達郎の曲が心に染み込み、蕎麦食べて、餅食べて。少しすると町中の店が乙女のハートを応援し始める。ニュースで『熊出没注意』との警告が出ていた。どうやら寝起きが悪いらしい。

私は現在一年半ガーナにいる。一年目は体で感じる全てのものが新鮮でわくわくした。手紙では“暑くて毎日が夏”とか“同じ日の繰り返し”なんて書いていた。人ではなく、虫が、花が、作物が、風が雲が教えてくれる季節、それが二年目。

みんなの大好きなマンゴーがお目見えする頃、私はやってきた。今年は幸運にもその木の下で畑をやっている。マンゴーを飽きる程食べたよ。誰も居ない畑で物音がする。小鳥がカシューを突いた。それを拾って食べると美味しい。もうそろそろ雨が来る頃かな。

葬式が多すぎて仕事がキャンセルになる。マラリア勃発の雨季到来だ。畑で突然風が林の間を走り、木々が騒ぎ始めた。空を見る。「サーナ・ワナ。」[8]　二度と会いたくない天敵に今年も負けた。敗北した証は腕にボツボツと残った。痒い。
マーケットではピカピカの野菜たちが並ぶ。おばちゃんたちも元気元気。オマケもどっさり。落花生を見かけたら雨季の半ば。早く収穫しないと芽が出ちゃうからね。村の家庭でフーフーを作るようになったらもう雨季が終わり。

もうすぐ卵茄子が主役になるぞ。フレッシュバンバラビーンズは畑を持っている人しか食べられない一品。とってもとっても美味しいから、今のうちに畑のない人はご近所をチェックして。そろそろ通常ミレット[9]のピトゥ[10]が一時限定メイズ[11]使用になるのかな。

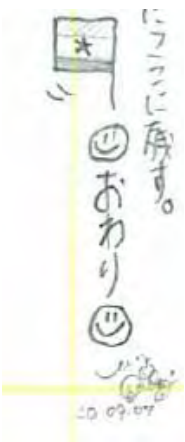
食べられないものがあっていい。できないことがあっていい。自然が教えてくれる季節を体で感じていたい。初めて感じたことは体がしっかり覚えていた。だから今、季節と共に思い出が蘇り、何だか嬉しくて笑っちゃう。

人々が野焼きをはじめ、畑は残渣のみの寂しい姿になる。マーケットではドライ野菜の隣に妙にきれいで高い野菜がいる。

---

[8] 現地語で「雨が来る」の意味。
[9] ひえ、粟などの雑穀類
[10] 雑穀類で作る現地の蒸留酒
[11] とうもろこしの粉

景色が茶色の色鉛筆一本で塗れるようになる頃、私の任務が終わる。
だからずっと忘れないようにここに残す。
これが私の小さな幸せ。



イメージ写真：木といえばマンゴーの木。大木から伸びる枝の隅々まで、マンゴーの実が生い茂る。

ガーナの人たちへ、ありがとう！！

日本の青年がアフリカの大地に放り込まれ、右往左往しないわけがない。いくら、日本で任国の事情や、異文化適応のための研修を受けたからといって、自力で生活することは無理であると断言できる。任国の地に着いた隊員たちは、まず、生活に慣れることから始まる。それも、水を手に入れることや、マーケットで買い物をすることから始めなくてはいけない。大海原に放り出された隊員を、助けてくれるのは、いつも現地の人である。道に迷えば、相手が知らなくても、一緒に迷いながらも目的地まで導いてくれるおせっかいとも言えるほどの優しさに心を打たれる。

現地の人の助けを受けることは、隊員の活動中、数え切れないほど多くある。楽しみや、苦しみ、そして時には嫌なこともあるが、そのような感情をともに享受してくれるのは、同じ任地にいる日本人ではなく、現地の人である。活動で思い悩んでいるときも、病気で苦しんでいるときも、近所の子供の笑顔一つで、やる気が沸いてくることすらある。また、慣れない現地語で、コミュニケーションができた時のうれしさは、心に焼き付いていることだろう。

日本から派遣された隊員が、活動を終えるまでに、彼らからもらった優しさや喜びと同じだけのものを、返すことはできないだろう。おごることなく、謙虚に、そして笑顔で、彼らの気持ちを全身で受け止められるだけのおおらかな心を持って欲しい。

また、アフリカの人が持つ、敬いの気持ちを忘れずに、これからの人生を歩んで欲しい。

隣人、生徒、友人から、勇気や優しさを、胸いっぱいに頂いた隊員たちからの16のメッセージを送ろう。

「遡れば18年前」

平成元年2次隊　山本直也
職種：無線通信機　任地：ウェスタン州タコラディ

私は今から 18 年前の 1989 年 12 月より 2 年間、無線通信機の隊員として Takoradi の P&T（現 Ghana Telecom）で活動をしていました。

その P&T で働くスタッフの中でも、同じ年代（当時私は 24 歳）の4人のガーナ人スタッフとは仲が良く、いつもバカ話をしては笑っていました。

時は流れて 2006 年の 1 月、私は小学校 6 年生になる息子を連れて、14 年振りに里帰りをすることにしました。

里帰りをするにあたり、10年以上連絡をとっていなかった、かつての職場宛に手紙を書いたのですが、覚えているのは住所のみで、届くかどうかさえ分かりませんでしたが、1ヶ月ほどたってその4人のうちの1人から返事が来ました。相変わらず Takoradi に居ることや、その当時のスタッフの消息が書かれており、最後に「再会を楽しみに待っている」とありました。

そして里帰り。Accra に数日滞在の後、任地の Takoradi に移動し、4 人の中の 2 人と再会しました。少々容姿が変わったとはいえ、昔のままのノリと陽気は相変わらずで、14 年の歳月の流れがまるで嘘のように感じられました。

後の 2 人とは Takoradi から Accra に戻ってから、懐かしの Shangri-la Hotel で会うことができました。

写真：山本隊員OBと同僚（山本隊員OBより）

14 年が経ち、私を含めて 5 人は中年になりました。みんな結婚をして子供がいます。そしてそれぞれの職場で仕事をし、悩みながら「親父」として頑張っています。

日本とガーナ、離れていても、10 年以上音信不通であっても、14 年前に芽生えた友情は、消えてはいませんでした。

それが 14 年ぶり里帰りした「ガーナで見つけた幸せ」です。

おまけ
2006 年 1 月の隊員総会にお邪魔させていただきました。会場でお会いした後輩の皆さんの顔を見て・お話をして、見かけは少々変わっても変わらずに受け継がれている「ガーナ隊員魂」を感じました。それも今回「ガーナで見つけた幸せ」と言えるでしょうね。

「生徒たちの夢と努力」

平成13年度3次隊　木村健太
職種：理数科教師　任地：ボルタ州レクレビ

ガーナを去ってから、早いものでもう3年たってしまいました。もう、いろんなことを忘れてしまったなー。

ガーナで見つけた幸せは、なんと言っても最高の生徒に出会えたことです。

エヴェ民族の民族性なのか、トーゴ国境まで歩いて30分という地域柄なのか、レクレビの生徒たちは、アクラやクマシの人々とはまた違って少し控えめで、ガーナ人らしからぬ（失礼！）真面目さを持っていたように感じます。

それでも、音楽が鳴り出せば、みんな手拍子とともに踊り始めるところは、やっぱりガーナ人です。

生徒たちはそれぞれ将来の夢や目標を持ち、それに向かって日々努力していました。でも、彼らにはいくら努力してもどうにもならないことが、日本に暮らす私たちよりもはるかに沢山あります。また、同じことを達成するために必要な努力の量も、日本で育ってきた私たちよりはるかに多いと思います。そのような環境においても、自分の将来を真剣に考え、努力を続けていた生徒たちのことを思うと、今でも「自分もがんばらなくちゃ」という気持ちになります。

ちょっとうれしかった出来事は、写真を撮るときいつも私が「ピース」をしていたら、いつのまにか、生徒もみんな自然にピースをするようになったこと。レクレビの村では、今でもみんなピースしているのかな。

写真：当時の木村隊員と学生達
（木村OBより）

「所長の一言」

昭和54年度3次隊　梅沢康
職種：配管　任地：アシャンテ州コノンゴ

「ガーナで見つけた幸せ」と言っても色々有ったので、具体的に何が幸せだったのか解りません。只、ガーナで3年過ごせたと言う事実が幸せだったと思います。当時ガーナは、JOCV 派遣国の中で状況が最悪？？と言われていました。確かに赴任して半年間位は果たして2年間耐えられるか不安でしたが、然し平川事務所長の「まずガーナを好きになる事、ガーナの友達を沢山造る事、そして健康な体で帰国する事、これでおまえらの任務は十分だ！！」と言う言葉を念頭にガーナ人とアパテシュ[12]、パームワイン[13]を飲みました。結果、当初の不安は消え3年間ガーナに同化してしまいました。帰国後ガーナで人生を狂わせ JICA 専門家でパナマ、コンサルタントでブータン、ヴェトナム、トンガで仕事をしましたが、夫々の国の人達と楽しく過ごせたのはガーナ人から得たメンタリティがあったからだと思います。今でもガーナの汗と土の臭いが懐かしく思い出されます。ガーナの皆さん「メダワセ　パー[14]！！」

写真：当時の梅澤隊員と隣人（梅澤隊員OBより）

[12] 現地のジン
[13] 椰子酒
[14] Thank you very much

「Flash」

平成17年度9次隊　川本清隆
職種：エイズ対策　任地：イースタン州コフォリデュア
平成 18年度9次隊　職種：プログラムオフィサー　任地：グレーターアクラ州アクラ

友人と待ち合わせる際、「着いたら携帯を Flash してくれ」と言われた。意味がわからず解説の必要だったその Flash と、2 年経っても縁が切れないとは思わなかった。

Flash は日本で言う「ワン切り」である。通話代を節約するために、何かしらの合図代わりに Flash を使う。この「何かしら」程度であることがガーナらしさである。

ガーナ滞在中、何度も何どきも Flash に見舞われた。到着や出発の合図代わりなど昼の活動中は当然ながら、早起きガーナ人は日の出前から用もなしに合図代わりに Flash をしてくる。いや、彼らにとっては挨拶でも十分な用である。早朝に Flash されることはしょっちゅうであった。

最初の頃は、「用があるならかけて来い」という意味で Flash を Flash で返していた。変な時間に Flash されるので仕返しのつもりでやっているのだが、相手は Flash するくらいの時間帯なので全く困らない。逆効果で、頻繁にされるようになってしまった。しかしこれが、時間が立つに連れ「Flash 届いているぞ」と知らせるために Flash するようになっていった。ガーナ流に馴染んできたのだろう。気持ちだけでなく生活習慣も早寝早起きのガーナ人時間に近づいていった。

また、間違い Flash が多かった。何度も Flash されるため着信番号にかけて「番号間違えているだろう」と指摘しても、またかかってくる。どうやら、携帯に登録しているのではなく暗記してかけていて、覚えきった記憶はなかなか変わらないようだ。慣れてくると諦められるようになり、深夜に間違い Flash で起こされても苛立たなくなった。性格がガーナ人のようになっていったのだろう。

日本に帰ってきて、弊害が出ている。ガーナ流になったその性格が、日本人離れしている。「何とかなるだろう」「適当で良いや」では済まないことを放っておく癖がついているのだ。日本社会復帰は大変である。

そんなときに、海外からの着信番号で Flash された。かけ直してみると、ガーナの友人が出た。

「Wo ho te sen[15]。」

今もその友人たちは、深夜に Flash してくる。語学の問題があるかもしれないが、時差を説明しても良くわからないらしい、飛行機どころか村から出たこともほとんどないような人たちだから。

Flash で起きてしまったときはかけ直している。国際通話料になるからいつもではないけれど、いつでもかけ直したいくらいの気持ちである。最初の頃に苛立たされていた Flash に、嬉しさを覚えるようになるとは思ってもいなかった。「ガーナで見つけた幸せ」はすぐに気付けるような安っぽいものではないだろう。だからこそ、ガーナの人々に密着して生活した時間は貴重である。また合図代わりに Flash したいものである、「ガーナに着いたぞ」と。

[15] How are you?

「教え子」

平成９年度１次隊　鈴木良和
職種：理数科教師　任地：ボルタ州アゴティメ

2 回目のガーナ赴任で現在シニア隊員をしています。

ちょうど 10 年前に一般隊員としてガーナに着任したのかと思うと感慨深いものがあります。こっちはすっかり忘れていたのに昔の教え子に 2 回ほどアクラで声をかけられました。男子と女子に。うれしかった。本当に。

男子は現在中古車販売の従業員をしており、格安の値段で Sir(先生)に車を売ってくれるとのことでした。まだ昔の面影が残っており、彼が生徒だったときのことを思い出しました。とあるときマーケットに行くと彼がいました。学校で彼の姿を見なかったので「どうしたのか？」と聞くと、「学費が払えなくて学校から追い出された」といいました。気の毒だなと思っていると、おもむろに手に持っていた靴のブーツを私にみせ「いいブーツだろ」といいました。「いいブーツだね」と私がいうと、彼はニコリとし、「今日親からもらった学費で買ったんだ」といいました。彼は満足そうでした。勉強のほうはアンポンタンでからっきしだめでしたが、彼の素直な人間臭さが好きでした。

もう一人の女子は街頭の電話番です。彼女はあまり目立たず印象がうすい生徒でした。彼女とは夕方の帰宅時にまた出くわしたのですが、そのとき彼女は赤ん坊をおぶっていました。私が「赤ちゃんがいたんだ」と聞くと、はにかみながらにっこりしました。(教え子に先を越されたなと一瞬考えが横切りましたが気を取り直して)「旦那さんは何をしている人？」と聞くと、「警察官」と答えました。「旦那さんが警察官なら別に街頭の電話番をしてお金を稼がなくてもいいんじゃない？」と聞くと、彼女は「今は警察官の寮に住んでいるけど、彼と子供と一著に暮らす家が欲しいから彼と頑張ってお金を貯めているの」と答えました。そして彼女は「またね」といって歩いていきました。すやすや寝ている赤ちゃんと彼女の後ろ姿を見ていると、大人になったんだなと思うと同時に「がんばって」と自然に言葉が出てきました。

イメージ写真：携帯電話のプリペイドカードを売っている女性
（アクラにて）

「ガーナでお世話になった人たちへ」

平成16年度1次隊　小林論子
職種：青少年活動　任地：アシャンテ州テツレフ

帰国して、最も聞かれる質問。

「ガーナ、どうだった？」

当初はいろいろ答えていたけど、どれも物足りなかった。しっくり来る答えを模索した1年。
そして、辿り着いたのがコレ。誰に対しても、いつでも、いつまでも。

「ガーナだったよ。」

日本でも「Ghana、ガーナ、がーな」の言葉を連発し、その中で渦巻く想いは、結局は望郷と感謝の念から来るものだと思う。

彼らに教わったこと、それが私の「ガーナで見つけた幸せ」の一幕かもしれない。

Amoh、年長者への絶対的敬意を教えてくれてありがとう。私には真似出来ません。

Sakyi、遠くからでも、いつも私を見つけて手を振ってくれてありがとう。時々「Megumi!」と呼ばれるのは、結構へこみます。

Fosu、どんなに忙しくても「I' m coming！」と答えてくれてありがとう。時としてその返事は不適です。出来ないことは言わないほうがいいよ。

イメージ写真：ガーナのお菓子

Linda、いつも「Yo,Yo」と話を聞いてくれてありがとう。拙い英語とTwi語[16]を併せた新語を理解してくれたのはあなただけです。

Appiah、会議で大喧嘩しても、終ればいつものあなたに戻ってくれてありがとう。でも、喧嘩中に「あ??」を連呼するのは止めてください。

Frampon、お給料の不満をほとんど言わなかったね、ありがとう。何度あなたの寡黙さに助けられたことでしょう。

[16] ガーナの言葉の一つ

Alice、あなた無しでは生活出来なかったよ、ありがとう。お礼に日本男児紹介しないとね。

Rebecca、学校に戻ってきてくれてありがとう。ごめん、預かった布持ち帰って来ました。

Donkoh、味方になってくれてありがとう。頼りない Madam で申し訳なかったです。

Ankra、寮に呼んでくれてありがとう。見たくないも無いものを見させていただきました。

Simon、出席簿を一緒に付けてくれてありがとう。100 人分の読み方テストは厳しかったです。

イメージ写真：ガーナの子供たち

Mama、娘にしてくれてありがとう。母親が二人になりました。

Papa、家族にしてくれてありがとう。おかげでホームシックにならなかったです。

Ben、親友だと言ってくれてありがとう。家族だから姉になるはずなんだけどな。

Kwasi、こっそり間違えを教えてくれてありがとう。でも正解が分からなかった。

Mephia、ご飯を分けてくれてありがとう。唾液たっぷりのスープは辛さ控えめだったよ。

Chief、手を繋いでくれてありがとう。なんでいつも中指なんだろう。

イメージ写真：ガーナの子供たち

Evans、最初に声を掛けてくれてありがとう。名前の後に歳を聞くのは控えなさい。

Sapon、いつも気に掛けてくれてありがとう。その歳で女心を掴み過ぎです。

Elvis、叱られても、泣かされても、纏わり付いてくれてありがとう。おかげで私のシャツはいつもあなたの涙と鼻水で湿っていました。

Mother、ゴミを拾ってくれてありがとう。おかげで飴のゴミが一つ減りました。

John、何度もプロポーズしてくれてありがとう。おかげで運を使い果たしました。

「アヨヨ[17]ばあちゃん」

平成17年度3次隊　髙木香苗
職種：エイズ対策　任地：イースタン州アコソンボ

「アヨヨ、アヨヨ」

明日、アクラへ上京するという日にも、その可愛らしい声と笑顔に負けて「一盛りちょうだい」と買ってしまう。

すると当たり前のように銀色のタライに入っている新鮮なアヨヨ（モロヘイヤ）を手に取ってビニール袋がはちきれそうになるくらい
おまけして詰め込んでくれる。

アヨヨばあちゃん、こんなに食べきれないよ・・・（笑）

アヨヨばあちゃんには、出店用の販売台がないから、いつも地面にござをひいて座っている。日差しの強い日には、自分が隠れるくらいの大きな麦わら帽子をかぶっているから姿が見えない。そんな時は、向かいのおばちゃんが教えてくれる。

イメージ写真：マーケットで売っているアヨヨ（アクラにて）

「アヨヨばあちゃんいるよ」と指さして。

収穫がうまくいかなかったり、体調が悪かったりするとマーケットへ売りに来ることができないから、いつもの場所にいつもの人がいるとホッとする。

新鮮なアヨヨを買えることよりも、
おまけしてビニール袋いっぱいにつめこんでくれることよりも、
大好きなアヨヨばあちゃんの元気な姿が、
私を幸せな気持ちにさせてくれる。

[17] モロヘイヤ

「心が通じた瞬間！！」

平成17年度3次隊　吉田倫子
職種：理数科教師　任地：セントラル州スウェドロ

「9月に帰るよ」

と、ホストファミリーに告げて、ふらふらと旅をしていた。9月に入ってからもう10日以上が経っていた。明日帰るよ、という電話をしなくてはと思っていた矢先、ホストマザーから電話。

「元気？いつ帰ってくるの？」

ガーナに来てから1年半。ちょっと心が通じたかな、と思った瞬間でした。

「夕食会」

平成18年度2次隊　宮本佐知子
職種：エイズ対策　任地：アシャンテ州ベクワイ

私がガーナに来て、一番楽しいと思う時間は、任地の子供たちと遊ぶ時です。赴任当初は、なかなか一緒に遊ぶ事ができず大人との交流が主でした。しかし今では仕事帰りの道で会う子供達と一緒にダンスをしたり、サッカーをしたり、現地語のテキストを音読するのを喜んで教えてくれたりします。

そして、夜になると、その家のお母さんが夕食を招いてくれ、暗い中小さなライトを照らし一緒に手で食べます。家の中ではなく、外です。そんな現地の生活を、暖かいガーナ人の家族と共に過ごす時「ああ、ガーナに来てよかったなぁ。」と思いとても幸せな気持ちになります。

活動で悩むことがたくさんあるけど、仕事後の夕～夜の、この時間が今の自分の支えになっています。

イメージ写真：遊ぶ子供たち

「笑顔で挨拶！！」

平成18年度3次隊　小野麻里
職種：視聴覚教育　任地：アッパーウエスト州ワ

毎朝職場に行く途中、通り過がりの子ども達に“Nasara, how are you? We are fine, thank you!”（そこの白人の人、元気ですか？僕達は元気です。ありがとう。）と、とびっきりの笑顔で声をかけられる時、この上ない幸せを感じます。

イメージ写真：笑顔の子供達

「心配かけてごめんね」

平成18年度3次隊　佐藤里香
職種：看護師　任地：ノーザン州タマレ

首都から約700km北上した、ガーナで第3の都市といわれるタマレという都市に住んでいます。同じ隊次の隊員の話とは異なり、比較的静かな環境で過ごしています。あまり訪問客もなく、周りの人も、外国人だからといって、あまり干渉してくることはありません。

隣には、大家さんにあたる人が住んでいます。彼らは南から移ってきた人で、私が勉強している“ダバニ語”は話さないため英語で会話をしています。いつも挨拶程度で、それほど親密に話したことはありませんでした。

ある時、他の地方へ行く用事があり、いつもは“首都に行って〇日まで戻らない”と伝えるのですが、出会えなかったため、黙って数日間留守になる形になりました。4～5日後に戻ったら、長女が私のもとに走ってきて“しばらく見なかったから心配した。”と抱きしめてくれました。

日本では、近所付き合いが希薄になっていますが、ガーナで感じた初めての大きな幸せでした。

「分かち合い」

平成18年度3次隊　五十嵐謙一
職種：理数科教師　任地：アシャンテ州オブアシ

― Sir の授業は楽しい！ ―

70分
1トピックスに
賭ける身に
喜喜分かち合う
長月の絆

写真：熱心に授業を行う五十嵐隊員

「わたしの隣人」

平成１８年度３次隊　須藤崇
職種：村落開発普及員　任地：ノーザン州トロン

ファタオ君は4歳である。でももう既に自転車に乗れるのである。自転車といえば、日曜の午後、木漏れ日あふれる公園で、お父さんがほらしっかり持っててあげるからと嘘を言いながら、子供はしっかり持っててよと頼みながら、転びながら泣きながら。それをお母さんがニコニコ見ていながら。なんとか乗れるようになって、みんな笑った。はい。めでたし。みたいのが日本的な幸せの風景である。でもファタオ君は4つ上の兄ちゃんにそこらへんで乗り方を教わったのである。そういう日本的幸せな風景はガーナにはないのである。ボクは分かったような気がした。ガーナには幸せはないんだなって。

アブライ君は、１６歳の少年である。「日本に行きたいんだ」「金がかかりますよ」「ガーナは貧しいんだ。日本は豊かなんだろ」「物質的には豊かなんですよ。でも。。。」そこまで言って考えるのである。幸せってなんだっけ。

アブラヒムさんは30歳である。でも日本でいうところのニートである。今流行りの。朝早く起きてサッカーをすることから一日が始まる。昼間はニート仲間とトランプに興じる。楽しそうなのである。日に2回サッカーをして、日に3回飯を食べて、日に5度、しっかりアッラーに向かって祈る。ただ毎日は繰り返されていくのである。

シェリフさんはゲストハウスのスタッフである。ボクに優しくしてくれるのである。それはボクがお客さんだからだと思っていた。ボクが外国人だからだと思っていた。一緒にヤギを見ていた。ヤギは一心不乱に草を食んでいた。水も欲していた。それだけだった。たまにじゃれあったりしていたが、基本的にいつまで見ていてもそれだけだった。夜、一緒に空を見ながら寝ることにした。プラネタリウムより星が多い、ステキな夜空である。ちょっと星ありすぎで汚い空。くらいの勢いの空を見ていた。シェリフはアメリカにも行ったことがあるし、ヨーロッパにも行ったことがあると言った。「アメリカはどうだった？」「クレイジー」「どうして？」「みんな急いでいる。忙しそうにしている。余裕がない。ガーナが一番さ」。ボクは、幸せは日本にもガーナにもなくて、アメリカにも、世界中のどこにもあるわけではなくて、ボクの心の中に幸せはあって、他の人のそれぞれの心の中に幸せがあって、それで月が明るいんだと思った。

家に帰る時に、トロ[18]というバスの中でファタオ君のお父さんと席が隣になった。その隣の席ではおばさんがムシャムシャと飯を食っていた。ボロボロこぼしながらムシャムシャ食っていた。ファタオ君のお父さんに、かすがすごい勢いでこぼれていた。軽く積もっていた。ズボンもかなり汚れていた。おじさんはそれを見て、つまらなそうに手でさらっと払った。そのときに、ファタオ君へのおみやげらしきものがお父さんの手からこぼれた。目があって、二人で笑った。

[18] ミニバンの公共バス

「自分が忘れかけていたもの」

平成１７年度２次隊 石田裕一
職種：バスケットボール　任地：ノーザン州タマレ

あの頃はバスケットボールが全てだった。学校が終わってから暗くなるまでずっと、シュートを打っていた。ただ、バスケットボールをしているのが楽しかった。一生懸命練習すればプロになれるって、本気で信じていた。年を重ねるにつれて、自分の能力と限界を感じてきた。バスケットボールから離れようと悩んでいたときに、運良くガーナに行く機会を得た。バスケットボールのコーチとして。

ガーナでバスケットボールの楽しさを教えるつもりできた。でも、自分がバスケットボールの楽しさを忘れていたのかもしれない。赴任当初、劣悪な環境でのバスケットボールに正直参っていた。凸凹で亀裂の入ったコート、磨り減ったボール、灼熱の太陽。おまけにガーナ北部ではもう何年も試合はなかった。練習試合をする相手すらいなかった。でもガーナ人選手は一生懸命僕からバスケットボールを学ぼうとしていた。バスケットボールがうまくなってもお金にならないし、職にもつけない。決して生活が豊かなわけでもないし、バスケットボールをやるのにもお金はかかる。でも選手らは貪欲にバスケットボールを学んでいった。ひたむきにバスケットボールを楽しむために。

子供たちはいつも僕の球拾いをしては、パスをくれた。子供たちはただボールに触れることが、とても嬉しそうだった。いつもボールに触ることに、ハングリーだった。いつも大人の練習を見にくる少年に、将来何になりたいか尋ねると、“ I want to be a basketball player.” と答えた。この少年の夢を叶えさせてあげたいと思った。大きな夢じゃないけど、すごく大きいような、少年の夢。子供たちに練習の機会を与え、試合の機会を与えた。いつも羨ましそうに大人の試合を見ている子供も、今日は主役である。大人に真似て円陣を組み、掛け声をかけている子供たちが微笑ましい。すごくすごく真剣で、そして、なにより楽しそうだった。

そこには、自分が忘れかけていたものがあった。ただ、純粋にバスケットボールを楽しむということ。ガーナで見つけた、僕の小さな幸せ。僕の幸せの形、それはバスケットボール。

写真：バスケットボールを指導する石田隊員

「ガーナのいいところ、わるいところ」

平成16年度2次隊　野底勧
職種：理数科教師　任地：ボルタ州アンロガ

帰国して 10 ヶ月弱、働き出して半年が過ぎた。ガーナでの生活を忘れたわけではないけど、仕事に追われる毎日で「ガーナの日常」を思い出すことは少なくなってしまった。

でも、「ガーナで見つけた小さな幸せ」について考えているうちに、逆にガーナでは気づかなかったこと、改めて考えると「あ、そっか、そういうことか」みたいなことをちょっとずつ発見できている気がする。大きな幸せや大きなムカつきって派手ですぐ思いつくけれど、「小さな幸せについて」ってとこがミソで、日本にいてもガーナにいても、小さな幸せって時間が経つにつれて全てが当たり前になって、感受性を全開にする努力をしていないと素通りしてしまうから。

日本に帰ってきて、ガーナでの体験が日本の日常を違う視点から見られる一つの判断基準になっていることをすごく感じる。

テレビのニュースでは暗いニュースばかりで明るくなるのはスポーツの時間だけだし、満員電車の中で隣のおっさんの匂いに身動きできずただ耐える時間だとか、仕事を上司にムチャ振りされたりだとか、それって日本の日常の中ではただただネガティブなことかも知れないけど、「GTV[19]はつまんなかったなー」とか「満員電車よりトロの方が時間長かったよな、ビックマダム暑苦しかったし」とか「周りが仕事しない上に理解されないこともあったよな」とか考えると全然平気になってしまう。

日本にもガーナにもいいところ・悪いところがあって、ガーナにいればガーナの嫌な所が目に付くし、日本にいると「最近日本はダメな方向に行ってるよね」となってしまう。そんなときに違う視点から物事を判断できる基準を持っていれば、違う風景が見えてくる。ガーナの嫌なことを帰ってきてから思い出さないように、今、日本で辛いことも後になれば忘れるだろう。これはすごく大切な自分の能力になっていると感じる。

ガーナの二年が、自分の人生にとって一体何だったのか。こうやってちょっとずつわかってくるんだろうなぁ。まあゆっくりじっくり考えよっと。

結局、「ガーナで見つけた一番大きい小さな幸せ」は「生徒との何気ない会話」です。何だか普通の回答になってしまいましたが。

[19] ガーナ国営放送（Ghana TV）

「胸いっぱいの幸せ」

平成17年度2次隊　大釜正希
職種：エイズ対策　任地：イースタン州アビリウ

★ Anigye ～ Hapiness ～ 幸せ ★

ガーナのみんなに聞いてみた。
“Den na ma wo Anigye？[20]”
日曜日、教会に行くことが幸せ。
仕事をして、お金を得て、ごはんを食べることが幸せ。
ごはんを食べている時が幸せ。
1年を迎えることができたときが幸せ。
クリスマスが幸せ。
何も起こらないことが幸せ。
何もなく、健康でいられることが幸せ。
好きな人といられることが幸せ。
サッカーしているときが幸せ。
朝起きて、神に祈ることで受ける幸せ。
朝起きて、元気であることが幸せ。
お金があることが幸せ。
特に何もなく、いつも幸せ。
勉強しているときが幸せ。
音楽を聴いたり、歌ったりしているときが幸せ。
誕生日を迎えることが幸せ。
平和であることが幸せ。
毎日が幸せ。
遊んでいるときが幸せ。
孫に囲まれているときが幸せ。
友だちと話しているときが幸せ。
お金があって、食べ物が食べることができるから幸せ。
Kwame（僕）がTwi語を話したから幸せ。
いろんな人と会えることが幸せ。
家族と会えることが幸せ。
子どもが生まれたときや、誰かが子どもを産んだときが幸せ。
学校に行っているときが幸せ。
Black Stars[21]が勝ったときが幸せ。
学んでいるときが幸せ。

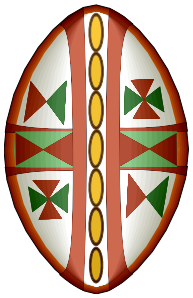
[20] あなたの幸せは何ですか？
[21] ガーナ代表のサッカーチームの愛称

元気にファームに行けることが幸せ。
自転車に乗っているときが幸せ。
友だちと会ったときが幸せ。
Jesus を信じていることが幸せ。
何もなく、元気でいられることが幸せ。
Kwame（僕）と会っているこの時が幸せ。
いろいろ学んで、自分が考えることができて幸せ。
ゴスペルを歌っているときが幸せ。

数えてみたら、1万人くらいのガーナ人が僕のことを知っていた。たくさんの人が僕の名前を呼んでくれること。そしてその1人ひとりからうける幸せが、僕の幸せ。

イメージ写真：ケープコーストの風景

理想の国とは？



ガーナは、他のアフリカ諸国と同じで、貧困と戦っている。地方に住む庶民の生活には余裕などあまりないのは明白である。しかし、彼らの持つ、心の豊かさや、人生を楽しむ姿に、我々は魅了される。日本の生活に慣れた我々が失ったことの多さに気づかされる。

「貧しい」とは何か、隊員は悩まされる。豊かさとは、物の豊かさなのかと。

洗濯機も、掃除機もない彼らの生活に、友人とゆっくり語らえるだけのゆとりの時間があるのは、何故だろうか。

現地の人と生活すると、多くの疑問が生まれ、多くのことを悟らされる。欧米や他の先進国からのお仕着せではない、理想の国をガーナ人自らが考え、つくりあげていくことを切に願う。

また、外から物事をみると、今まで見なかったものが見えてくることもある。ガーナで気づき、悩んだ隊員が見つけた、14の小さな幸せを送ろう。これを読んだあと、再度、ガーナにとっての理想の国造り、人造りを皆で考えて欲しい。

「教師の礎」

平成2年度1次隊　山崎丈
職種：理数科教師　任地：セントラル州ケープコースト

私には第二の故郷と呼べる場所があります。それは、ガーナ共和国セントラル州ケープコースト（現地名オグワー）です。そこには、約 10 ほどのセカンダリースクール（中高等学校）がありました。その一つケープコースト大学附属高校には、私が尊敬してやまないミセス・アダム校長先生がいつも威厳を持って、教員や生徒に接してくれていました。彼女は、最近日本人の教師が忘れかけた教育の本質を、私に示してくれました。

赴任して 2 ヶ月が過ぎたある日、朝起きると声が出なくなりました。しかし、子ども達に迷惑はかけられないと、黒板に指示だけを書いて進める『声なし授業』を二日間も続けました。放課後、私より年上の生徒の勧め通り、20km離れたビリワの同期隊員の所に行って、日本語で話しをすると、すっと直りました。原因はストレスでした。英語や現地語がうまく話せず、コミュニケーションがとれなかったせいでしょう。赴任後、英語が得意ではなかった私は、英語力向上のため、日本人に会わないようにしていたのです。

翌日、校長に呼ばれました。「声が出るようになってよかった」「がんばってくれているのはうれしい。ありがとう」などと言われた後に、次のように言われました。

タケ、あなたが一所懸命やってくれているのは、生徒だけでなく、同僚の教師にもいい影響を与えている。本当に、感謝している。ありがとう。でもね・・・。

（校長が、おもむろに校長室の窓から見えている火焔樹に目をやった）

タケ、あの赤い火焔樹の花は見えているかい？タケを見ていると、ガーナの美しい火焔樹の花やきれいな鳥の声が、聞こえていないような気がします。教育者は、花や鳥などの自然を見て、美しさなどを感じる『心の余裕』を持って、子ども達に接することが大切なのです。タケには、そういう教師になってほしいと願っています。

写真：職員写真（前列中央が校長先生）
山崎隊員OBより

ただ、日本の受験勉強のように、早く正確に数学の問題が解けるだけを教えようとした新米教師には、衝撃的な内容だった。教育大学在学 4 年間では、学ばなかった教師の真髄を教えて頂いたような気がしました。それからの 3 年間のガーナでの教師生活はもちろん、帰国後の日本での十数年に及ぶ教師生活でも、校長先生から頂いた言葉を大切に教壇に立っています。赤い花をつけた木をみると、校長先生を思いだし、ガーナでの初心に戻ります。メダワセ・アイ[22]。

[22] チュイ語（ガーナの言葉の一つ）で、ありがとうの意味。

「ホームステイの思い出」

平成16年度1次隊　川原章裕
職種：理数科教師　任地：ウェスタン州アサウィンソ

協力隊としてガーナで活動したことを通して私は大変貴重な経験をさせてもらった。なかでも私は、2 年間ガーナのごく平凡な家庭でホームステイをするという他のどの隊員よりも珍しい体験をしている。

この家族は銀行のドライバーをしている父、ステーション[23]でお店を経営している母、そして子供が5人である。子供は中学生2人、小学生2人、そして幼稚園児が一人である。幼稚園から学校に行かせることができるこの家族は比較的裕福な暮らしをしているといえる。

私はこの家族とともにガーナにある一般的な生活をした。

朝起きると家族はいっせいに水浴びを始める。その後軽い朝食をとり両親は仕事へ、子供たちは学校へ出かける。母は一番下の子を幼稚園へ送ってから働きに行く。私も一緒に幼稚園へ見送りに行くことがあった。それから私も本来任務の理数科教師として学校へ出かける。仕事が終わると私は、今度は小学生の子供たちと一緒に幼稚園へ子供を迎えに行く。普通のガーナの幼稚園児なら私を見ただけで逃げていくが、家族の子供だけは別である。嬉しそうに私のところへ寄ってきてくれる。それから一緒に家へ帰る。子供は疲れているので時々私がおぶって家へ帰った。家へ帰ると子供は遊ぶか昼寝をする。私の部屋には扇風機があるのでそこが涼しいと知っているので子供は私のひざの上で昼寝をする（写真）。夜になると家族が全員帰宅し、夕飯をとる。夕飯に限っては常にガーナ食だ。毎日、フーフー、バンクー[24]を食べた。日曜日には家族で教会に出かける。私も一緒になっていくこともあった。極当たり前のガーナでの生活である。

写真：当時の川原隊員のひざの上で昼寝するホストファミリーの子供（川原隊員OBより）

私には2年間でガーナに家族ができた。年配者を敬い、いつも陽気な家族だ。日本では薄れてきている家族の本来の姿を見ることができた。

「幸せ」という字を見てみると二つのパーツでできている。上側の『土』と下側の『¥』だ。『土』はもちろん土地、『¥』は円、つまりお金だ。ガーナには十分に耕された土地や舗装された土地もなければ十分なお金もない。不便ではあるが不幸ではない。むしろ、人々はとても幸せそうに見える。私が見つけたガーナで見つけた『幸せ』は、まず人ありきの『倖せ』だったと思う。

[23] バス乗り場
[24] ガーナの現地食

「助け合い」

平成１５年度１次隊　渡部和江
職種：家政　任地：セントラル州ニューエブ

買い物に行った帰り、車が故障してしまった。土砂降りの中、荷物をもってあるいているとうちにおいでといって、雨宿りさせてくれた。雨がやみそうもなかったので荷物を運んでくれ、私に傘を貸してくれ家まで送ってくれた。マイシスターだからといって。今の便利な日本ではこんな経験はないだろうな。人の助けなしでは生活できないから、人との関わりが深くなる。

１０歳くらいのジョンという男の子が友達をつれて家の前の草刈りにきてくれた。ごほうびにビスケットをあげた。すると、それを見て近所の小さな子どもたちがやってきた。ジョンは小さな子どもたちから順番にあげ、そして、最後の一枚をいっしょに草刈りをした友達にあげた。ジョンは僕の分はいいよといった。友達がビスケットを半分にしてジョンにあげた。あるものを分け合う子どもたち。

風で地面に落ちた電線を間違って握って女の子が大やけどをした。村の薬屋さんで薬をぬってもらい、お父さんが家の前の木の下で一日中女の子をだっこしていた。お母さんも兄妹たちも周りで見守っていた。病院はなくても、温かい家族の愛情が傷をいやしてくれる。

とれたての果物のおいしさは忘れられない。ココナッツ、パイナップル、オレンジを取りに近所の子どもたちとよく出かけた。こうやって子どもたちと過ごす時間は本当に楽しかった。

物や情報のあふれた日本からガーナへ。雨が降ったら学校は休み、停電の夜は何もすることがなくてはやく寝る。自然体で人とのおしゃべりを楽しみ、困ったことがあればお互い様で、助け合う。不便さや感覚の違いにとまどうこともあったが、それも、今思えば本当に貴重な体験だった。人との関わりのおもしろさや大切さを身をもって感じた。やっぱり、温かくて陽気で優しい人たちとたくさん出会えたことが一番心に残っている。

写真：椰子の実を手に抱えるガーナの子供たち
（渡部隊員OGより）

「特別な方からの特別な贈り物」

シニア海外ボランティア　平成17年度前期　永田耕作
職種：放射線技師　任地：アシャンテ州クマシ

近年国内では患者側のモラルが問われています。読売新聞の調査では全国79の大学病院のうち59病院からの回答で平成 18 年の 1 年間で 430 件の患者から病院職員が暴力を受けました。理不尽なクレームや暴言だけで 990 件あり、回答していない病院、公立病院、私立病院などを含めると相当な数に上るはずです。内容は医師が顔を殴られ骨折した、医師が聴診器で首を絞められた、看護師が花瓶を投げつけられたなどです。

本来、医療者と患者は信頼関係を築き、相互協力の下で病気を克服していくものですが、病院側は、暴力対策に警察 OB を職員に雇い、暴力行為を想定した対応マニュアル作成し、院内暴力を早期に発見・通報するための監視カメラや非常警報ベルを設置するなど医療者と患者の間が希薄どころか対立関係に陥っています。

ガーナの場合は国民性、文化の違いはあるでしょうが暴力行為や暴言をはくことはなくむしろ友好的です。

出勤すると玄関前で待っている患者さんたちが、お早う！のみならず、気分はどう？奥さんは元気？いいネクタイしているね！とそれぞれが声をかけてくれます。

出張などで休んだ後に出勤すると病気で辛いはずなのに笑顔で両手を合わせ膝を折ってウエルカムと迎えてくれるし、交代で昼食に行こうとすると待合いの患者がまだ行かないでくれと手を合わせて頼まれる、背中いっぱい腫瘍ができて辛そうな 5 歳の子供がお世話になっているからとパンを持ってきてくれたときなど自分を必要としてくれていると感じました。患者さんからのお礼は一切いただかないようにしておりましたがこの 5 歳の子供からのパンは断り切れませんでした。

ありがとう！嬉しい！を通り過ぎて胸が詰まる思いでした。全てではありませんがこのような患者さんとのふれあいは遠く日本から離れての不自由な生活の中でふと幸せを感じました。

それから、日本に居ては到底あり得ないような JOCV の方々との交流も幸せを感じましたことをここに付け加えさせていただきます。

「ありがとう」

平成9年度1次隊　土井ゆり子
職種：理数科教師　任地：セントラル州ケープコースト

まずは30周年おめでとうございます。ちょうど我々9-1 が着いたときに、20周年記念があったような記憶があります。なるほど。あれから10年経つのだから30周年で当然ですよね。隊員時代からもう10年も経ったということがいまひとつ信じ難いですが、良い二年半をすごさせてもらいました。

「幸せ」とはちょっと違うかもしれませんが、私がガーナで一番目からうろこ的な驚きを感じたのは「ありがとう」と頻繁に言われることでした。

学校に言って授業をすれば、生徒が、マダム、授業してくれてありがとう、と休み時間に言いに来る。街中で会ったガーナ人にも、ガーナに来てくれてありがとう、と言われる。私達日本人だったら当たり前に感じていることにごく自然に感謝する。常に「感謝すること」を忘れない人たちなんだなあ、と思いました。そして「ありがとう」とさらっと言うことができる。

隊員活動を終え、国際協力の仕事を続けているうちに色んな国と仕事をし、色んなカウンターパートと会いましたが、やはりあれはガーナならではなように思います。ありがとうとごめんなさいは言い易いようで、とても言いにくい言葉で、それをさらっと自然に言う(ごめんなさいはなかなか言わないかな？) ガーナの人っていいなあ、と思います。感謝することを忘れると、「かんしゃ」に「く」がついて「かんしゃく」を起こす、という法話を聞いたことがありますが、ガーナの人たちのあの笑顔ってそこに原点があるのかも、と思います。もしかしたら今はガーナも変わっているのかもしれないですが、あのままのガーナでこれからもいて欲しいなあ、とつくづく思うのでした。

それでこそアフリカの星！

私もガーナにいた時のように「感謝」を忘れず、「初心」を忘れず、やっていきたいと思います。

写真：ケープコーストのお祭り。感謝を表現しながらの行進が続く。

「挨拶」

平成１９年度２次隊　高谷弘枝
職種：理数科教師　任地：アッパーウェスト州ジラパ

ガーナに来てちょうど1ヶ月が経ちました。まだまだ見るもの知ること新しいことばかりです。

先日、任地でのホームステイを終えました。私の任地はアッパーウェスト州のジラパという所です。任地に行って見つけた幸せがありました。それは「挨拶」という文化です。任地はとても田舎であるせいもあってか、道すがら会う人、会う人に挨拶すると、みんな笑顔で返してくれます。習ったばかりの現地語で挨拶すると、とても喜んでくれます。私もうれしい気分になります。本当にすばらしい文化だと思いました。私は中学生のときに挨拶に関する弁論をしたことがあります。私の育ったところも、だいぶ田舎なのでみな顔見知りで誰にでも挨拶するのが当たり前でした。あるとき都会の親戚宅に泊まりに行ったときに、その地域では近所の人に挨拶していないということを知って大変驚いたので、それに関する弁論をしたのでした。私の田舎も今は住宅地化し、人も増え、挨拶の文化も薄れつつあり、帰省する度に少し寂しい思いをしています。

ガーナに来てみて、無いもの、足りないものがたくさんあるなと感じる毎日ですが、失ってほしくないものも少しずつ見つかってきました。これから、もっともっとガーナで幸せを見つけていきたいと思います。

「楽しく過ごそう」

平成１９年度２次隊　加賀雅子
職種：看護師　任地：セントラル州ケープコースト

ガーナに来てまだ3週間。“ガーナで見つけた幸せ”とは・・・・・・・・・。

私が今思う事は、ガーナ人はガーナで笑って楽しく過ごしており、本当に幸せだと感じる。むしろ日本人よりも幸せそう。お金がなくても、家族と一緒に過ごし、笑顔でいられれば、それは幸せなんだと思った。日本人も日本で家族と一緒に毎日笑顔で過ごすことが幸せなんだと思う。

イメージ写真：ガーナのことを知りたいならマーケットは外せない。怖いマダムに睨まれても、笑顔で挨拶！！
左：バンクー（ガーナ料理）に使う粉、中央：なすびときゅうり、右：海塩、唐辛子と共にスナックを売っている

「至福のひととき」

平成13年度2次隊　加藤雅春
職種：理数科教師　任地：イースタン州ベゴロ

Mr. Awuah という配属先の物理の教員が、外国人ボランティア教師担当として、隊員からすればカウンターパート[25]として、着任時アクラに迎えに来てくれ、離任時見送りもしてくれた。私は彼を通してガーナの文化、歴史、教育事情、困りごと相談、チーフとの面会など、あらゆることについて援助を受け、学び、経験した。彼のおかげで協力隊員らしく草の根レベルにおいて、可能な限りガーナのありのままを吸収することができたと感じるし、彼が教えてくれたことを利用して、自分なりにガーナ人と接してゆくすべを見出すことが出来たとも感じる。

彼とは帰国後数年たった今でも時々やり取りをしている。そんな彼が用意してくれた週末の時間が、私にとって「至福のひととき」だった。今でもその時食べたフーフー[26]のにおいが、記憶とともによみがえってくる。「至福のひととき」というと、日本人の感覚では高級レストランに余所行きの服装で出かけることを想像する人もいるかも知れないが、任地には相応の場所がないし、彼の場合はその逆であった。至福というのは食事の質ではなく心の満足感なのである。

「午後、ビーチサンダルを引っ掛けて彼のうちに行き、18 時くらいにつれだってアパテシ（現地のジン）を飲みに出る。彼の奥さんは 14 時くらいから夕食の準備に取り掛かっている。飲み屋といっても人の家の軒先、裸電球の下 1 時間ぐらい雑談し、家に戻ると奥さんの手料理であるフーフーが出来ている。大皿にのっているフーフーに熱いスープをかけながら、大抵庭で星空と裸蛍光灯の下、二人面と向かい一緒に素手で食べ、また雑談する。アルコールもほどよくまわり満腹にもなって眠くなればそれでお開き。20 時には消灯。」

イメージ写真：パーム・ナッツ・オイルを作っているところ

やることはそれだけなのだが、とても心地よく、かつ有意義に感じたのだ。余計な気遣いや装いをせず、時は過ぎ行くまま気にもせず、手作り料理をひとつ皿から一緒に食べ、雑談は、隊員活動での疑問・質問にとどまらず、互いの衣・食・住・文化のこと、恋愛のこと、何でも話すことができ、彼はどんなこともわかりやすく丁寧に答えてくれた。毎週末、自分が信頼のおける人と腹を割って心置きなくかたり、感情を共有することができた。思えば彼はしばしば私にこう言っていた。

「君は僕の弟だ。何かあったら遠慮せず言ってほしい。」

たまたま良い人に出会うことが出来ただけと言う人がいるかもしれない。もしかするとそうなのかも知れないが、私自身はガーナ文化に基づくもてなしの心とか、物質的貧しさとは相反する人々の懐の深さ、ゆ

[25] 同僚
[26] ガーナの現地食

っくり流れる時間、人間味、思いやり、宗教心など社会全体の雰囲気が背景にあるのではないかと思う。そのいくつかは先進国からみれば古きよき時代では往々に存在したことで、ややもすると日本も発展の代償に失いつつあることなのではないか。

Mr. Awuah のことを思い出すと、成果主義とか効率性とかそういうことに今の自分が流されがちになって、思いやりや分かち合いの心をなおざりにしてしまっていないか反省してしまう。「私の時間もあなたのもの」というのもガーナで耳にしたが、この機会にガーナでの生活やその中で感じた小さな幸せを少し振り返ってみたい。

イメージ写真：ガーナの地方都市（タマレ）

イメージ写真：地元のバー（アクラにて）

「ピアス」

平成17年度2次隊　橋本麻衣子
職種：エイズ対策　任地：イースタン州アクロポン

道を歩いていると、“オブロニー（白人という意）ぺ”と言いながら子供からおっさんまで、いろいろな人が寄って来る。“金くれ”という子もいる。大人でさえ、いきなり近寄ってきて“お腹すいた、何か買ってくれ”“カメラちょうだい”など、言うことがある。オブロニー＝お金を持っている、ことになっている。なにかをねだるのは、めずらしいことではない。

ついこの間は、タクシーの運転手に“ビスケットを買ってくれ”と言われた。正直、ビスケットを買えるお金以上、私は持っている。でも、買うことはしない。

一人の人に与えたら、全員に同じことをしなければならない。なので、“お金なんか全然もってないよ。”と言うと、“おぺ。。。じゃあ、オレが今度、君にビスケットを買ってあげよう”と陽気に言われた。そんな応えは、予想してなかったので、なんだか、心が痛いような、熱いような。。。

そして今日、いつもこまごました物を買うお店の前で、うろうろしていると、店主が声をかけてきた。“何が欲しい？”と聞かれたので、今日は何も買わないことを告げた。すると、パックジュースとビスケットを引っぱり出してきて、私にくれた。慣れない場所で買い物をするとき、いつも白人用プライスで騙されたりしないかなあ、なんて考えている私にとって、お金を請求されることなく物を与えてくれるこの出来事は、ほんと温かい気持ちにさせられる。

もう一つ。数週間前に、通りすがりのおばあさんのピアスがかわいかったので、“すてきなピアスをしてますね、よく似合ってますよ。”と話しかけた。すると、“じゃあ、今度あなたにもプレゼントしよう”と言われた。それを聞いて、私は、ただの社交辞令として受け止めた。が、そんなことを言ってくれただけでも嬉しくて、お近づきになれたお礼にでも、折り紙で折った鶴を紐で繋いだ物を、次の日そのおばあさんの家に持って行った。喜んでくれた。そして、そんな出来事も忘れかけた今日、歩いていると、遠くの方から、“おいで、おいでぺ！”の声が。そんなことは、よく言われるので、普段は笑ってごまかしてその場を去るのだが、今日はなんとなく、その声のする方へ行ってみた。すると、見知らぬおばあさんが、ピアスを差し出して、“どれか好きなの選んで、持って行きな。”と言う。え？と思ったら、そのおばあさんは、数週間前に会ったあのおばあさんの姉だという。妹さんは、私を見かけないもんだから、私の家の近くに住んでいるお姉さんの所に、ピアスを預けていたのだという。そして、私を見かけたお姉さんが今日、私にそのピアスをくれたというわけ。

“途上国の発展のためにボランティアに来た”ということを日々考えさせられ、“私が何かを与えてあげなければ”と少し焦っていた気持ちが少しなくなった出来事。私が一方的にするのではなく、住民と一緒にやり、同じ目線．．、は現実問題無理だとしても、極力近い目線で物事を見れる様になれたらいいと思う。

「ガーナで気づいた大切なこと」

平成17年度3次隊　山田綾佳
職種：婦人子供服　任地：ボルタ州アンロガ

自分の為の服より、別の誰かの為の服を作っているときの方が楽しくて、

帰国後の進路のことなんかより、愛犬の病気が気になって仕方ない。

彼氏ができることよりも、妹が結婚したことが嬉しかった。

ずっとこだわっていた職業の夢なんて、大切な人たちと比べたらどーでもいいことだった。

そういうことにやっと気付けたことが、幸せです。

だけど、そう思えるようになったのは私も周りの人たちに、大事にされているからです。

イメージ写真：カカオの実を干している様子

「ガーナにとっての発展とは？」

平成15年度2次隊　佐藤昭則
職種：デザイン　任地：グレーターアクラ州アクラ

「….yo-go yo-go yo-go!」「Yes PK!」「Pure　Water！」 学校を一歩出ると裏は、アクラの中心部マコラマーケットの一角でした。学校が終わると毎日のようにその日の食材や雑貨を探しに良く出かけたものです。いつもよくしてくれる野菜売りのおばちゃんたちや、お盆にお菓子を並べて売っている若い娘さん、アイスボックスを置いてジュースを売っているおっちゃんなどなど。。。。前を通り、挨拶を交わしながら、マーケットの中を見て回るのが楽しみでした。そこには、決して裕福とは言えないながらも、生き生きとして、活気のあるガーナの日常がありました。

私の活動先であるアクラポリテクニックは、ガーナでもかなり恵まれた境遇の人たちが集まる技術学校でした。JICA 事務所と所属先との行き来の中では、いわゆる「途上国」で生活しているという感覚はあまりありませんでした。私の周りにいる人たちは、ガーナのいろいろな問題について、ある意味「遠くから」見つめているところもありました。ガーナは西アフリカ諸国の中でも「優等生」だと言われます。いろいろな問題があるけれども、その一方で、状況を改善しようというエネルギーも感じられる国です。現在の先進国と言われる国々の混沌とした状況から比べると、まだまだ発展の余地を残した「成長」の活気が感じられる、人々が「生き生きとしている」そんな国だと思います。

写真：当時の佐藤隊員とガーナ人（佐藤隊員OBより）

生徒たちに授業で「先進国のような発展を求めるか、昔からのガーナらしいのんびりとした生活を求めるか、それは自分たちが選択することだ。一度経済発展が始まると、成長し続けないと社会を維持できない。。。」と話したことがあります。生徒たちとこの話題についてディスカッションをしたとき、生徒たちの間でも意見が分かれ、大議論になりました。「ガーナは、田舎に行くと果物などの食べ物が豊富にあって、買わなくても日々の生活には困らない。でも、テレビや携帯が欲しいから働いてお金を稼ぐんだ。」と言った生徒がいました。また、「ガーナには中国のように人が行き来できないような田舎で社会から隔離され取り残されてしまう人がいないんだ。どんな田舎でも道がつながっていて、その気があれば街に出てきて商売もできる。意識とやる気の問題だけだ。」と言った生徒もいました。その一方で、争いを嫌い平和を好む、思っていることがあっても控えめに自分を抑えたりする、ちょっと日本人に似たところのあるガーナ人たち。彼らの気持ちの根

底にある「大家族主義＝みんなで幸せになろう」という、日本や先進国が忘れそうになっている「人を想いやる」気持ちと、経済成長、という相反する状況の中で首都の学校で学んでいる姿が印象的でした。

私がガーナで見つけた幸せは、「人の温かさ」や「他人を想いやり、人を楽しませる」気持ちに触れられたことかもしれません。いま日本にいてガーナを懐かしむときに思い出されるのは、人に触れ合った想いばかりです。

ガーナ建国50周年おめでとうございます。JOCV 派遣が30年も続いているのはガーナの人々に支えられて来た歴史でもあります。そして、この記念すべき年にこのような機会をいただいたことに誇りを感じます。JICA・JOCV に於いては、早くガーナが大発展して派遣終了になることを望むこところですが（笑）ガーナと日本をつなぐ架け橋として益々の活躍をお祈りしております。ガーナにおいては経済的発展だけでなく、アフリカの「おおらかさ」や「日々の生活を心から楽しむ」気持ちを忘れずに、調和のとれた発展が続いていくことを望んでやみません。そして、ガーナチョコが無くなりませんように。

イメージ写真：どこまでも続くまっすぐな道
（ガーナの地方道路/　ノーザン州）

「ガーナ人の優しさ」

昭和58年度1次隊　泉山純子
職種:理数科教師　任地:セントラル州ソルトポンド

始めてガーナの地を踏んだ 83 年からもう既に 20 年以上もの年月がたってしまいました。その時はまさか将来そこに、しかも長期的に住むとは思いもしなかったのですが、99 年からアクラの住人となり、最近の 2 年間の不在を経てちょっと前にガーナに戻って来たところです。現在ではアクラの街にはたくさんの物があふれ、ガーナ人も昔と比べるとだいぶスマートに見え、昔とは大きく違って見えるのですが、良くも悪くも、本質的なところではあまり変わっていないのかな、と思ってしまいます。

隊員として到着したばっかりのガーナは 2 年間も住むことができるかと不安にされるような経済のどん底状態だったのですが、Warm Heart of Africa を自認するだけあり人々は親切だったことを思い出します。配属先の女性の校長先生は職員住宅が不足する中でも遠く日本から来た若い女性を優遇してくださり、同居人のエリザベスはいつも丁寧にガーナの生活についていろいろ教えてくれました。帰国直前にマーケットに別れを告げに行った時に、いつもトマトを売ってくれていたおばちゃんが目に涙を浮かべ「これをもっていきなさい」とお餞別をくれたことも忘れられません。隊員のわたしよりも生活が厳しそうなのに…。他の隊員からも国内旅行中にバスの中で会った見知らぬガーナ人が家に泊めてくれたという話もよく聞かされたものです。中にはガーナ人の親切にすっかり慣れてしまい、帰路に寄った別のアフリカの国で見知らぬ人の親切に甘え痛い目にあった人も何人かいたとか。

数日前に日本経由でアクラに戻り街中を歩いていて思ったのですが、知らない人もすれ違いざまに Good morning, how are you?と声をかけてくれるんですね。今日は家の近くで Long time!と言ってくれたおじさんがいたけれど、誰だったのかな。日本だったら下手をすると外出しても人と一言も会話をしないで一日が過ぎかねないな、と思うとガーナ人の大らかさを感じ入ってしまいます。ガーナ人の夫とはしょっちゅう喧嘩するし、最低！！って吠えてしまうこともあるのですが、考えてみたら夫だけではなく他の多くのガーナの人々の優しさにすっかり慣れてしまい当たり前のことのように思い甘えているんですね。あるガーナ人の友人が言っていたのですが、ガーナの財産は人だ、と。何年たってもかわらないガーナ人の優しさ、大らかさがこれからも変わらずにいて欲しい、これからも甘えさせて欲しいなと思うこの頃です。

「静かで穏やかな気分」

平成１８年度１次隊Ａ　奥村建樹
職種：理数科教師　任地：ダマンゴ

- 年配の女性にあいさつするとよく返してくれる。
- 隣人との距離が近い（よく面倒をみてもらっている）
  TERM 休み中学校内を歩くと、とても静かで穏やかな気分になれる（時間がゆったりと流れている）

イメージ写真：学校の校庭内

「ガーナで見つけた幸せ IN とろとろ」

平成17年度2次隊　佐藤育子
職種: エイズ対策　任地:イースタン州ニューアブレム

とろとろに乗ると、よく人間観察をする。
大人も子どもも、若者もお年よりも、いろんな人が乗ってくる。

ある日、背中に赤ちゃんをおんぶした母親が乗り込んできた。
狭いとろ[27]の乗り口。母親は、自分の頭をぶつけないよう、かがめて乗り込んでくる。
でも赤ちゃんの頭がぶつかりそうだ。
と、思った瞬間、さりげなくメイツ[28]が赤ちゃんの頭に自分の手をそえた。

なんてことないことかもしれないけど、ホッと心があたたかくなる光景だった。

母親が見ることができないところでも、誰かが見守っていてくれる。
そんな環境が、子どもたちの周りにはあるのかな～と思う。

イメージ写真：庶民の足トロトロ（アクラにて）

[27] とろとろの略称
[28] とろとろの車掌

水と電気

日本で生活するものにとって、ガーナでの生活を想像することは難しい。しかし、ガーナの地で生活を多少でもしたものにしてみれば、「別に不安になることはない」という、アドバイスが口から出てくるのではないだろうか。彼らだって、ガーナに赴任する前は、不安と心配で一杯であったのに、どうしたことか、先輩隊員になってしまえば、このような余裕のある口ぶりとなる。「想像できないことはできない。また、実際に経験しなければ、わからないことは沢山あるよ」、と言いたいのだろう。そんな彼らでも、活動当初、悩まされたのは、停電と水の確保である。

アフリカ人が頭にバケツをのせて、水汲みをする光景を写真で見た人は、沢山いるであろう。しかし、この重労働を、身を持って知っている日本人は少ない。まず、水を汲みに行くには、場所にもよるが、相当な距離を歩かなくてはいけない。私の知っている隊員の任地では、片道1時間というところもある。水汲みの場に無事に着き、バケツに水を入れたのは良いが、頭に載せるには、経験と力がいる。もし、手元にバケツがあるのであれば、試して欲しい。頭に載せるので、バランスばかりに目が行きがちであるが、水が一杯に入ったバケツを頭の高さまで持ち上げることの大変さを知って欲しい。その状態で、もと来た道を延々と帰るのである。これを、毎朝行う。どれだけの重労働であろう。蛇口をひねれば水が出ること自体が、私にとってはマジックと思える。そして、水のありがたみを味わったものは、意識しなくとも自然と環境に優しい生活が身につくものである。

ガーナでの生活を通して見つけた、9つの小さな幸せをおすそわけしよう。

「ガーナに来て」

平成8年度1次隊　南雲達也
職種：理数科教師　任地：ブロングアハフォ州アテブブ

早いもので、協力隊でガーナに着てから、既に 10 年以上の月日が経ってしまいました。当時の私は絵に描いたような田舎隊員で、隊員間でも陸の孤島と呼ばれていました。もちろん水道なんてありません。雨季には雨水を溜めて、乾季には井戸水で生活していました。季節によっては、家の周りに蛍が大量発生します。蛍の間を抜けて家の外の水浴び場に行き、満天の星空を見ながらバケツ一杯の水での水浴びは、贅沢なんだか貧しいのか良く分かりませんが、なかなか出来ない経験でした。

水がないとトイレがどうなるか。小用は野原で道行く人と挨拶を交わしながらし、その他は家の中でバケツにしておりました。夜になると、バケツマンがバケツを取替えに来てくれました。当時の JICA 事務所次長が私の任地を訪問した際に言ったのが、「いやいや、これは昔の貴族のトイレですな～」。物は言いようです。それまでいまいち愛着の湧かなかったトイレでしたが、次長の一言で、愛着が湧いてきました。そんな水道のない生活を 2 年間したわけですが、この度の来ガではアクラ勤務の為、楽チンな生活を満喫していて水道の有り難味を忘れかけていましたが、そこはガーナです。勤務先の水道が半年以上に渡り止まり、再度水道の有り難味を感でさせてくれました。蛇口をひねれば水が出るというのは、幸せです。

写真：当時の自宅のトイレ
（南雲隊員OBより）

協力隊時代の同僚と、10 年に渡って文通（途中からメール）をしていましたが、久しぶりに会って、「いやいや、お前も老けたね～」と言い合うのは、いいものです。そんな彼も、一児のパパになっていました。当時のホームステイ先の息子も結婚して子供も出来、隊員ドミトリーの看板娘のマーサもオブロニと結婚。アクラも当時とは比較にならないほど発展し、本当にここガーナなの？！と思うことも最初はしばしば。のんびりしているガーナですが、確実に進歩してるんですね～。

最近の小さな幸せは、デノミです。プロジェクトでは 1 日に 50 万円～100 万円程度の現金が動く時が稀にあるのですが、銀行に「5,000 セディ札しかないんだよね～」と言われて、米袋一杯の 5,000 セディ札を渡された時は、泣きたくなりました。今でも「コイン持って行ってね」と言われて 1,000 枚くらい渡されることもありますが、札束に比べたら楽チンです。膨らんでいないお財布を見ては、時々にっこりしてしまいます。

10 年一昔、と言いますが、ガーナは変わっているようで変わっていなく、変わっていないようで変わっている、そんなところがまた、可愛いのかも知れません。

「停電の中での優しい灯り」

平成17年度3次隊　山口祐佳里
職種：理数科教師　任地：ノーザン州サラガ

日本で経験したことない停電。日本では、ほぼない停電。ガーナに来て毎日のように起こる停電。慣れてしまえば　No Problem!!　電気がなくてもチャコールで火をおこし、懐中電灯でご飯を照らし、手で温度を確かめながら食べて、ラストはみんなでトーキングタイム！この暗がりの中、みんなの声をじっくりきいて、昼間とは違う雰囲気で“会話を楽しむ”。コレ、日本ではない幸せ、ほんとうに！！

「停電で今日は何もできないやー」と言った私に、「オレたち、人がいるじゃないか」と言ってくれるガーナの人々。そんな人々に囲まれて暮らしている私は、本当に幸せ者です☺。

「上を向いて歩こうよ」

平成19年度2次隊　丸山弥津枝
職種：感染症対策　任地：ノーザン州タマレ市

- 停電の時、真暗で気分も落ち込みかけていた時、水くみに外に出て、上を見たら、満天の星空だった事。
- 皆、怖い顔して歩いている様に見えたが、現地語であいさつした瞬間、皆、笑顔であいさつを返してくれる事。
- 道で、ひよこやヤギの赤ちゃんを見つけたりすると、うれしくなる。
- 子供の笑顔

イラスト上、左：丸山隊員作

「ライト・オフ（停電）」

平成１８年度3次隊　坂田武範
職種：村落開発普及員　任地：セントラル州ケープコースト

嫌な時が基本的には多いのだが、時折このライトオフが、私をリフレッシュさせてくれる。

レポート書かなくちゃなーとか、仕事しなくちゃなーという日でも、夜ライトオフの場合、どうしようもなくなってしまう。これが、以前はストレス以外の何者でもなかった。

でも、次第にこれが慣れてきたのだ。すると、すっきりあきらめられるようになってきた。心置きなく、投げ出せるようになってきた。明日やろう！！それが十分自分を説得出来る理由になった。

結果、ぐっすり眠れる。溜まっていた疲れも取れる。朝起きて思う。「いい朝だ！」

幸せだわん。

イメージ写真：朝、配属先に行く途中で、何本食べただろう。焼きバナナです。（JICA事務所そばにて）

イメージ写真：そして昼飯は、フフ（ガーナの料理）モチモチした感触とスープが絶妙（アクラにて）

「はじめて気づく日常のありがたみ」

平成18年度3次隊　塩澤知子
職種：エイズ対策　任地：イースタン州マンポン

日本では気づかなかった水道、電気のありがたみ、そして、近所付き合いの大切さを改めて感じました。あと、日本の食生活の豊かさを感じました。

「スター・ライト」

平成18年度3次隊　仁科ゆかり
職種：青少年活動　任地：イースタン州アキムスエドロ

　停電の夜の星空がすっごくキレイで感激しました。日本ではなかなか見られない満天の星★　それを、ポーっと見ているだけで、気が安らぎます。

イメージ写真：ガーナの夜空は神秘的な姿を見せてくれる。

「停電と ipod」

平成１８年度３次隊　小路隆之
職種：PC インストラクター　任地：セントラル州アパーバ

☆ガーナでは、停電が多くて夜は電気が使えない淋しい時間を過ごすことも多いものです。

最近見つけた小さな幸せは、インターネットカフェへ行って、ipod にポッドキャストで、日本のラジオ、ニュースをダウンロードして、停電の時に見ています。日本のニュースってこんなに楽しいんだ！ってガーナ来て思います。また、日本語の声に癒され夜はぐっすり眠れます。私の小さな幸せ。。。

「停電と思いきや。。。」

平成１８年度３次隊　佐藤久卓
職種：村落開発普及員　任地：ノーザン州トロン

停電だと思っていた日に、電気があると、とても幸せです。

イメージ写真：ガーナ北部の風景

「辛い日々を乗り越え・・・」

平成18年度3次隊　池田航
職種：村落開発普及員　任地：ウェスタン州セフィ・アサウィアソ

ガーナと言えば、断水、停電、そして村上所長。
断水も停電も日本ではほとんど経験しないことであり、なれないうちは、とても辛い日々であった。しかし、慣れてしまえば突然幸せは停電時にやってくる・・・・・。
え！？何がかって？
私は幸せですよ。
あともう一つ、みんなと出会えたことかな。

イメージ写真：30周年記念フェスティバルでの光景

千人千色

来年には、ガーナ国への派遣隊員数の累計が1000名を越えるという。十人十色というが、1000人いれば、1000人分のドラマが生まれる。様々なバックグラウンドを持つ隊員が繰り広げる2年間のドラマは、朝8時からの連続ドラマよりも、喜怒哀楽に富んだものであり、人間の根幹に触れるものがある。

これまで、5カ国の協力隊員と共に任国で得た幸せを分かち合いつつ自分なりに人生を歩んできたが、協力隊に参加する人たちは、現代の若者と比べると、比較的、個性が豊かというよりは、個性の強い人が多いと常々感じる。それだけに青年海外協力隊事業は、魅力のある国民参加型事業となっているのかもしれない。協力隊に参加することで、さらに個性が強くなって帰っていく隊員を空港まで見送る時、「あいつ日本に帰って、日本の社会に適応できるかな」という心配よりも、「元気のない日本の社会やシステムを、協力隊魂で揺るがして来い！！」と思う気持ちが強い。今は流行らない、体育会系の勢いやノリが、まだ、ここにはあり、自分が隊員であったときの良き古い日々を思い出さずにはいられない。

今回、文集の記事を取りまとめていく中で、隊員からの記事を分類する作業は難しかった。様々な思いや、気持ちは、簡単には分類できない。そんな個性の強い隊員達からの20のメッセージを、あなたの元へお届けしよう。

「ガーナで授かった宝物： ３＋１」

平成８年度９次隊　丹みゆき
職種：理数科教師　任地：ブロングアハフォ州ケンヤツ

ガーナに初めて短期緊急派遣で赴任して以来、早いものでもう十年が経つのでしょうか。理数科教師として短期緊急で赴任し、一年の任期を終了してガーナを発つときには、あまりの暑さや湿気に馴染めず、一般隊員として3年半を過ごした愛しのケニアと比較し、「もう、ガーナへ戻ってくることはないだろうな。」と思ってガーナを離れた3ヵ月後、何かのご縁で、また、短期隊員としてガーナへ戻って来る機会を得ました。

その後、配属先の同僚であった現在の子どもの父親と出会い、あっという間に当地で十年、他の帰国隊員の方々のようにガーナが「懐かしい思い出」ではなく、進行中の現在なので、なかなか厳しい現実との戦いの日々が続いています。時々は歩み寄ることのあり得ない文化のギャップにぶち当たりながら、山積する課題をはね除け、日々、必死に生きているというのが現状です。

そんな私にとって「ガーナで見つけた幸せ」といえばやはり、ガーナで生まれた 3 人プラスお腹にいる 1 人の合計 4 人の子どもたちです。(「家族計画」等の保健案件の実施を担当しながら、気がついたら 3 人＋1 人の子宝に恵まれておりました。)「ガーナにいるとチャイニーズっていわれ、日本にいるとどうしてお顔が茶色なのっていわれて、私たちはいったい何なの？」と私の母に聞いた子どもたち、ハーフとして自分たちのアイデンティティ探しに日々、一生懸命のようです。親として出来ることは、ガーナでも日本でも何処でも生きていくことの出来る可能性を子どもたちに残しておくこと、そして、それがどんなにたいへんなことかも最近、ずっしりと噛みしめているところです。

ガーナの子どもたちの良いところは隊員時代にも感じておりましたが、授業中も積極的に手を上げて何でも参加したがるところ、大きくなっても会議等でも緊張せずに意見を発表する(喋りまくる?!)ところ、その反面、悪いところは言い訳ばかりするところでしょうか。我が子たちも日本語で発表したりすると照れたり、恥ずかしがったりするのに、英語になるとガーナ的に積極的になるのが不思議で、やはりこの子たちはハーフなのだなと感じています。

ついつい怒ると「ガーナ人みたいなことしないの！」なんて子どもたちにきれてしまうこともあるのですが、ガーナ、日本の両方のナショナリティを持つこの子たちが本当の意味で自分たちの存在をユニークであると認識し、誇りに感じるよう育てていきたいと思っています。ガーナで生活すること、日本で生活すること、どちらにもそれぞれの利点、不利点があり、どちらが子どもたちにとって最適の選択かということは現時点では不明ですが、これからも子どもたちのアイデンティティ模索の旅は続きそうです。

これからも試行錯誤を繰り返しながら、「ガーナで見つけた幸せ」を大切に育てていきたいと思っています。

「自由：協力隊員への課題」

平成１８年度１次隊Ａ　井上善之
職種：理数科教師 任地：アッパーイースタン州ボウク

思ったより、のんびり。
いや。むしろ、持て余すほどの時間。
そして、自由。

緻密に精巧に組まれた時間と空間に満ちた日本から脱け出し、1 万 4 千キロ離れたアフリカはガーナの一角で待っていたのは、文字通り“気まま”な隊員生活だった。そして、それはまさに隊員への“課題”でもある。

隊員活動。それは、志望動機や任地の状況などと同様、隊員によって千差万別となる。言うまでもなく、「活動は隊員自身の意思に委ねられる」からだ。そして、それが故に多くの隊員が悩み、苦しむ。

自分の存在意義。
できることは何なのか。
教員経験もなく、英語も出来ない、そんな自分がいて、何になるんだ！？
本当にこれでいいのか？　と。たぶん、それは、隊員活動が終わるまで続いていく。

でも、それでいいんじゃないか？と思うようになった。

写真イメージ：複数の道がある。どの道を選ぶのも自由。

周りから賞賛されるような活動をする隊員もいる。
目を見張るような成果を上げる隊員もいる。
めちゃくちゃアクティブに活動している隊員もいる。

でも、現実にいまここにいるのは自分で。
何の縁かは解らないけれども。

だから。悩むコトも、何かを出来ないことも、何もしてあげられなくても、
全部含めて、自分らしく活動すればいいんじゃないか、と。
だって、自分は自分。他の誰かじゃない。
俺は俺。
何かをすることも。何かをしないことも。それも、俺の活動。
焦らずに。一歩ずつ。精いっぱいに、自分らしく。

「自分らしく精いっぱい生きればいい」
のんびりさとは裏腹に濃密に流れた時間は、そう教えてくれた。

「ありがとうって手話で言える？」

平成18年度3次隊　齋藤あい
職種：村落開発普及員　任地：アッパーイースト州ボンゴ

はじめて手話で話した“ありがとう”。聞きたくなくて、話したくないこともあるけれど、ガーナの生活。

図：手話でありがとう（斉藤隊員　作）

「おいしい料理を召し上がれ」

平成18年度3次隊　堀真也
職種：PC インストラクター　任地：ノーザン州タマレ

おいしい料理を作る事。そして、それを友人などに食べてもらえる事。

イメージ写真：昼飯を作っている女性（アクラにて）

「言葉が通じることの意味」

平成１８年度3次隊　末廣そのみ
職種：デザイン　任地：アシャンテ州エジス

- ガーナ人と言葉が通じたときが幸せ。
- 電話でお母さんと話しているときが幸せ。
- 日本人がみんな同じ言葉で話せることは幸せ。ガーナには言葉が46種類もあるから。

「日々の健康」

平成１８年度１次隊Ｂ　安倍伸
職種：理数科教師　任地：ノーザン州タマレ

任短[29]にならないことが、小さな幸せだったことに気づきました。健康には、気をつけましょう。

イメージ写真：眩しいばかりの笑顔（Abiriw の小学校にて）

[29] 活動任期を短縮して帰国すること

「ゴミ、ゴミ、ゴミ」

シニア海外ボランティア　18年度後期　伊藤國廣
職種：生産・品質管理　任地：グレーターアクラ州アクラ

８月初め職場横の道路のごみ拾いをした時のことです。そこは幅10メートルほどの道でその脇は雑草に覆われてはいるものの芝生が植えてあり敷地との境は生垣となっています。雑草の中にはゴミが夥しくあり、毎日そこを通る時不衛生で見苦しいと思っていました。

そこでスーパーマーケットの袋を片手にＹシャツにネクタイ姿でごみを拾い始めました。ゴミは食いちぎり系水袋、アイスの袋、黒いビニール袋が主です。通りがかりの男性が立ち止まり、しばらく手伝ってくれ、さらに３人づれの男性が通りかかりその中の一人が作業に加わってくれたりもしました。

なんだか見も知らぬ人に手伝ってもらって一日ほかほかいい気持。

翌日の朝も引き続き塵拾いをしました。昨日同様、手伝いを申し出てくれる人や、一度通り過ぎて戻って来て、

「奇麗にしてくれてありがとう」

と声をかけていく女性がいました。さらに続けていると道の反対側から声をかけて来るひとがいる。私は「水を飲まないか」、かな？「ごみを入れる袋はいらないか」かな？と思って呼ばれるところに行きました。結果はどちらも外れ。それは家の奥から、

「これも持っていくかい」と、

とても満足そうな顔をして多量のごみの入った袋を持ってきてくれたのでした。え？

イメージ写真左・右：協力隊事業30周年記念の一環として行った、ゴミ拾いキャンペーンの写真

「わたしが幸せを感じるとき」

平成１８年度２次隊　尾上淳子
職種：エイズ対策　任地：アシャンテ州クマシ

日々、こんなときにしあわせを感じています。

【ガーナ人編】
スタイル抜群のギャルの後ろを歩いているとき。
いい感じにすきっ歯な人と会話をしているとき。
へんな呼び声がなく、平和に町歩きができたとき。
スーパーのレジ係が笑顔のとき。
おねだりしない人と仲良しになれたとき。
My sweet Ghanaian mammy と一緒にいるとき。
【買い食い編】
春巻きの具が豆じゃなくキャベツだったとき。
Tea を熱湯で作ってもらえたとき。
揚げたてのヤムをどっさりおまけしてもらえたとき。
選んだ魚が子持ちだったとき。
【エンターテイメント編】
Atlantic Radio の選曲がいかしているとき。
イブニングニュースのアナウンサーが Israel のとき。
Ghanaian DJ のなんちゃってパトワ[30]を聞いたとき。
こっそり踊っているとき。
【ボランティア活動編】
生徒の質問があとをたたないとき。
Headmaster がごきげんなとき。
授業のおわりに「アリガト～、マダム」と言われるとき。
【おまけ】
我が家のジェイソン（黄色いとかげ）と見つめ合うとき。
同期の美女隊員たちと再会したとき。
事務所で中元調整員をチラ見するとき。

ガーナのしあわせ、案外たくさん。
One Love, One People!

[30] Jamaica 訛りの英語

「The door of No Return」

平成3年1次隊　瀬戸口暢浩
職種：理科教師　任地：イースタン州アキムスエドロ

ガーナと言えば赴任直後のケープコーストでの語学研修中の体験が今も忘れられません。それは実は「幸せ」とは正反対の非常に悲しいものなのですが、その体験がその後の「幸せとは何？」という探求、そして「幸せを求める」取り組みに少なからず影響を与えてくれています。今回はその体験を紹介します。

それは語学研修中のある週末のこと、我々新隊員一同は研修の一環でエルミナ城を訪ねました。奴隷たちが留め置かれた暗く鼻に付く匂いのする地下牢、城の主たちが気に入った奴隷を上から見つけては招き入れる部屋、そして様々な奴隷貿易に関する展示や資料を目にし、ほとんど基礎知識無しにガーナに出向いた若僧だった私はかなりのショックを受けました。そんな中で最後にたどり着いたのが、城の奥の壁に隙間のように空いていた奴隷用の出口、「The Door of No Return」でした。それ自体もかなりショッキングでしたが、そこでさらなる出来事に遭遇しました。その時の館内ガイドによる見学ツアーには、我々20 人強の新隊員の他に 2 人のアフリカ系米国人が居たのですが、そのうちの一人がその場所でオイオイ泣き出したのでした。彼女の祖先はエルミナの地から連れてこられたということが分かり、わざわざ太平洋を越えガーナにやってきたものの、エルミナの街で自分の祖先につながる手がかりは何も見つからなかったそうでした。そして最後にやってきたエルミナ城でたどりついたのが、この城唯一の奴隷用出口「The Door of No Return」だったそうです。この地から連れて行かれた奴隷たちならこの出口を必ず通っているはずです。ですから彼女の祖先も何百年も前に、この出口のこの床の上を素足で歩いて新大陸へと渡っていったのでしょう。

上述した2人が今も米国で人種差別に苦しんでいるわけではないかもしれないのですが、それでも、歴史上のとある出来事に何代も後の子孫がいまだ翻弄されることを肌身にしみて感じたのでした。それ以来、植民者と被植民者、北と南、先進国と途上国、さらに広がって紛争と平和などなどが興味の対象となっていきました。かれこれ 17 年もこれらの課題を追っかけていることになります。そしてその間に滞在した国が、ガーナ、カリブ海セントルシア、英国、そしてシエラレオネ。つまり三角貿易の三つの頂点をぐるっと一周して、また西アフリカに戻ってきたところも、これまた何かに憑かれているようです。戻った先がシエラレオネというのも、映画アミスタッドの主人公のようで、つくづく自分はこの問題と切っても切れない縁があるのだと思っています。このようなライフワーク（幸せ？）を私に与えてくれたガーナに感謝します。そして最後になりましたが、協力隊ガーナ派遣 30 周年おめでとうございます。

写真：エルミナ城にある Door of No Return

「日々の生活で見つけた小さな幸せ」

平成１８年度３次隊　丸山吏乃
職種：村落開発普及員　任地：ノーザン州ダマンゴ

- 外で食べたご飯が“じゃり”って言わなかった時。
- 雨水を溜めながら時々量を確かめに行く時の胸の躍動感。
- マーケットで普段売っていないはずの、にんじんが売っているのを発見したとき。

「仕事（活動）帰りに飲むビール」

平成１７年度２次隊　土屋幸子
職種：コンピュータ技術　任地：ボルタ州ホ

日本で会社勤めしていたときも、仕事後にビールなど飲んで帰ることはよくありましたが、勤務時間が不規則な職場でしか働いたことなかったので
「夕方に仕事が終わり、ちょっと飲んでから帰宅する」
という生活を何ヶ月も繰り返したのは、ガーナで初の体験でした。

あまり遅くならないうちに帰宅すれば、同じフラットに住む小さな子どもたちが「おかえり」とはいわないものの、足元に集まってきたり、遠くから私の名前を呼びながら走ってきます。会社帰りに一杯ひっかけて、家族の待つ家に帰るお父さんの幸せってこんな感じなのかなと、想像できました。

写真右：活動の後の一杯はこれ。
（土屋隊員より）

「幸せな瞬間」

平成１９年度２次隊　浅野芙美子
職種：家畜衛生　任地：アッパーウェスト州ロウラ

・日中に冷たい水を飲む瞬間。
・子供に How are you?と聞いたらＩ’m fine thank you.とかえってきた時。

「ガーナで見つけた小さな幸せ」

平成１９年度２次隊　桂智佳子
職種:村落開発普及員 任地:アッパーイースト州ボルガタンガ

水道がなくても（シャワーができなくても）
電気がなくても（TV・PC ができなくても）
台所がなくても（冷蔵庫・ガスが使えなくても）
ないないづくしでも楽しんで生活している人たちと
いっしょに生活してみると
私も楽しくなってきて、
幸せだなぁと実感

イメージ写真：食事の支度をする女性

「ガーナに感謝」

匿名希望

結構長く生活しています。でも未だに日本語しか話せません・・・。

なんとか生きています。不思議。

町を歩けば誰かに名前を呼ばれます。地域に溶け込めてると実感。連帯。

一度日本に帰りました。日本食の有難味をじっくり味わいました。美味。家族の事を考えるいい機会になりました。絆。

ついこの前、配属先に冷蔵庫とガスクッカーを買ってもらいました。貧乏暮らしとおさらば。便利。

でも、ガスクッカーとガスシリンダーのレギュレータの径が合ってません。日本じゃあり得ないよね。適当。

活動がうまくいかずにイライラしています。でもそれをフォローしてくれる友達がいます。友情。

今やりたい事を思いつくままやっています。サラリーマンじゃできないよね。自由。

同時に、やるからには何らかの着地点は見つけなきゃね。失敗は恐れないが、失敗だけで終わらせちゃいけない。責任。

そんなこんなでいろんな思いを感じています。長い一生の中の貴重な二年を満喫中。感謝。

イメージ写真：ガーナの小学生

「足？！」

平成19年度2次隊　宮田麻理絵
職種: 手工芸　任地:ボルタ州ホ

「何だろう！？」

最初に見て思った感想である。

赤ちゃんをおんぶしているおかあさんを前から見ると、ウエストのくびれのあたりに小さな足が見えるのだ。ガーナでは日本とは違ったやり方で一枚の布を使って簡単に赤ちゃんをおんぶしている。布で赤ちゃんを巻きつけるため、前から見ると布が体にフィットしていて、二つの足だけが見えるという感じである。

今では、その二つの足が見えると赤ちゃんをおんぶしているのだとわかる。

その二つの足はとてもかわいく、私に微笑を作り出してくれる。

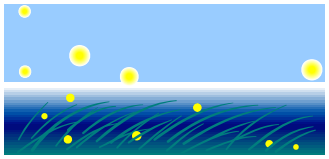
写真イメージ：お母さんにおんぶされる子どもの足

「蛍の光りの下で、すやすや….」

平成18年度1次隊 A　加藤貴夫
職種：理数科教師　任地：ボルタ州アバティメ

ガーナの生活で一番気に入っていることは、任地 Vane-Avatime(V/R)での生活だ。夜、とても涼しいのである。これは、雨季、乾季に限らず、とても涼しいのである。ガーナで最も標高の高い町 Amedzofe の隣に位置しているため、標高はかなり高い。熱帯夜が苦手（日中の暑さほど苦ではない）な自分としては、ファンやエアコンなしでも快適に睡眠がとれるということは、とてもありがたい。

また、山間にあるために自然が豊かで、住民も穏やかである。ほぼ一年中、蛍を見ることができたり、南十字星をはじめとした、日本では見ることができない星を観察できたり（これは、ガーナ全土で観察できる）することもうれしい。



「2つの星」

平成18年度1次隊 A　井上善之
職種：理数科教師 任地：アッパーイースタン州ボウク

街からの帰り道。
自転車をこぎながらふと上を見上げると、
日が暮れて間もない夜空に、早くも星が瞬いていた。

この地に来る前から期待はしていたけれども、ここは本当に星がよく見える。
空の真ん中を大胆に横切るのは、天の川。
日本の都市部でその姿を捉えるのはまず難しい。
ここではきらめく星のその奥で光の帯がまさに「川」のように雄大に横たわる。

南の空に目を移すと、力強く光る四つの星が目に入る。
言わずと知れた、南十字星だ。
四つの星と一つの添え星で形作られる南十字座は、思っていたより大きい。
これもまた、日本では限られた地域でしか見ることが出来ない。

ふと思い立って、学校のグラウンドで久々に星空観察をすることにした。

真上を見上げればしし座が空を駆り、その後を追うようにおとめ座、また、西の空ではオリオン座が没みかけ、少し高いところでシリウスが光っていた。
そして、北の空を見たとき、えも言われぬ感情に襲われた。

北の空低く、こぶし一つ分の高さのところに北極星が見えたのだ。
そこから少し離れたところに連なる七つの星。まぎれもなく北斗七星だった。
そして、それを見た瞬間、まるで昔から知っている人に久々に会ったかのような懐かしい感じがしたのだ。

北極星は、日本ではよく見ていた星。見慣れていれば、北の方角が大体解っていれば、「北極星の探し方」で探さなくてもだいたいひと目で解る。
北斗七星にしても、然り。見つけて感じるのは、まさに「懐かしい」という感覚。まるで、日本での生活を思い出すかのように。

それに対し、南十字は今まで見たことがなかった星。今までの自分の人生には無かった新しい要素。まるで、ここでの生活のように。

そんな二つの異なる星が、一つの空で一緒に輝いていた。
思えば、ここは北半球。当然ながら北極星が見える圏内。だいぶ低いけれども。

大学時代、よく眺めていた。望遠鏡をセッティングするには重要な星だ。そして、その頃からの星仲間はいまでもいい友人であり、遠く日本から私のここでの生活を心配しつつも見守ってくれている。たった今、この瞬間も。

ふと、そんな当たり前のことに気づけたことが、とても嬉しかった。

イメージ写真：南十字星

「ガーナまで届いているよ！！」

平成18年度2次隊　匿名希望

離れているがゆえに、逢えないがために心にしみる、親のありがたみ。
家族、友人の存在の大きさ。

手紙、電話、荷物、メール。

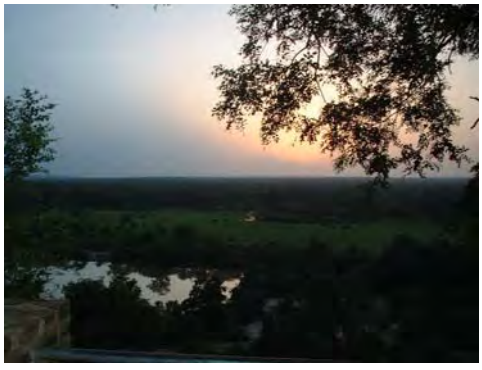
こんなにも自分を思ってくれる人が、自分の周りにはどれほどいるのか。
幸せを感じずにはいられない。

停電の真っ暗な中、1つの影法師がついてくる。
見上げると、満月が影をも創り出すほどの力強い光を放つ。
月明かりが夜道を照らす一時。

満点の星空。
その星々が降り落ちたかのように叢の間にひっそりと潜む無数の螢たち。
星影と蛍光が、月影をものみ込む瞬き。

茜色の空に、暗黒の空に、厚い雲の間を縫って、閃光が走る。
金色、銀色、紅色と、鮮やかな光が宙を舞う。
稲光の眩しさを肌で感じる瞬間。

自然が放つ様々な光。
それらが神々しく輝く温和な燈に、幸魂のうつろいを感じる。



イメージ写真：モレ国立公園（北部）の風景

「日常から生まれる私の幸せ」

平成19年度2次隊　今岡舞
職種: 理数科教師　任地: アッパーウエスト州ワ

豚やヤギの親子がたわむれているところを見ること。
学校の敷地内にいる犬や鶏やヤギを見ること。
服を手洗いすること。

イメージ写真：校庭内にいるヤギ

「いろいろあるけど。。。」

平成19年度2次隊　新本真代
職種: 感染症対策　任地: ノーザン州サベルグ

- 子供がとっても元気でかわいい。
- 人が優しくてあったかい。
- みんな良く笑い、良くしゃべる。
- 水がとっても少ないから、少しの水がとても貴重に思えるようになった。
- 毎日暑すぎて、嫌いだった日本の真冬がとても恋しくなった。
- 今まで当たり前すぎて気付かなかった小さな幸せにたくさん気付けた。貴重なものとか、忘れちゃいけないのに忘れそうになってたものを思い出すことができた。貴重に感じられるようになった。私が今健康で毎日笑って生きていること、そのものがすごく幸せだと気付いた。

－ **特別寄稿編** －

「ガーナ協力隊派遣 30 年に思うこと」

青年海外協力協会（JOCA）会長　金子洋三
元協力隊ガーナ調整員
（昭和57年3月～60年1月）

私が協力隊の調整員としてガーナに赴任したのは、1982 年の 3 月下旬、前の年の大晦日に J.J.ローリングス元空軍大尉（当時）の率いる軍事クーデターが勃発して約 3 ヶ月後のことでした。

このクーデターの背景にリビアの影響があったことから、西側諸国からの援助が停止。おりからアフリカ全土に広がりつつあった旱魃の影響も加わり、ガーナの経済は疲弊し社会的にも大混乱の時期でした。旱魃でボルタ湖の水位が下がり断水や停電が頻発、外貨不足で輸入に頼っていた基礎的な日用物資も市場から姿を消しました。最も困ったのがガソリン不足で、ガソリンスタンドに何日も夜を徹して行列し、10 リッターのガソリンをようやく入手するということも珍しくありませんでした。当時 60 人ほどいた隊員の食料を確保するために、ガーナ政府と交渉して日本からの援助米を分けてもらったこともありました。

このような事情のため、隊員の栄養状態も悪くマラリアなどの病気になる人も多く、世界で医療調整員（MC）が初めて派遣されたのはガーナでした。物資不足とインフレで国民の生活も困窮し、カウンター・クーデターが何度も繰り返される政情の不安の中での活動が続きました。このような状態の中でも、ガーナの人たちの陽気さは変わることなく、隊員たちも周囲のガーナの人たちに支えられ、また隊員同士助け合って、日本では経験できない極度の窮乏生活を結構楽しんでいたように思います。

5 年前、協力隊派遣 25 周年の年にガーナを再訪し、道路が整備され、新しいビルも沢山建設されて活気にあふれる首都アクラに 20 年の歳月を感じました。現在協力隊派遣国の中で最も多くの隊員が活動している国となったガーナですが、これまでの 30 年の歴史の中で、協力活動中に現地でお亡くなりになった井戸一哉さん、岡本摩奈さん、武邊寛則さん、清水洋一さんの 4 名の方々のことを忘れることはできません。彼らの遺志を継ぐ現役の隊員の皆さんの活躍を心から祈ります。

ガーナは、アフリカの中でもっともデモクラシーが成熟し定着した国だと思います。温和な国民性と知的水準の高さを兼ね備えたガーナがバランスの取れた発展を遂げ、他のアフリカ諸国のモデルとなるように、協力隊員の皆さんがお手伝いできるならこれほどすばらしいことはないと思います。元気でがんばってください。

「本部で、そしてガーナで感じたこと」

JICA青年海外協力隊事務局
海外第二グループアフリカチーム
野吾奈穂子

「アッパーウェスト州に行く、出張の話があるよ」
「ど、どこですかそこ～？！！(´Д`;)」

写真：ヤム芋の前でハイ・チーズ

JICA 本部でガーナの協力隊担当に着任してすぐの右も左も分からない状態の私はこうして1ヵ月後に初めてガーナの地を踏むことになりました。首都アクラから車で8時間、移動するだけで一日が終わってしまう距離です。この地では、日本では当たり前になっている「健康を守るための基礎的なサービス」を受けることが難しく、病院の機材や薬品も少なく西アフリカ特有の明るい茶色をした土で院内はうっすら汚れていました。また、日本なら常備薬や『家庭の医学』やかかりつけのお医者さんで解消できる健康上の不安さえ、経済的・地理的・インフラ上の事情で容易にぬぐえません。JICA はこの地で「本当に支援を必要としている人に届く支援」を目指して、医療機材の供与や協力隊の力で現状をよくしていこうとしています。こうした環境の中で活動しているボランティアの皆さんに敬意を表すとともに、これだけ多くの人が関わっていてもなかなか一朝一夕には変わらないガーナの窮状に思いを致すと切ない気持ちにもなります。

写真：ガーナダンスを踊ろう

それでも現地の人達、特に子供は元気！！　悲壮感なんてないんです。写真を撮る時のフラッシュが珍しいのか、カメラだけで子供たちははしゃいで盛り上がれます。市場を歩けば「オブロニ～」の声がかかり、振り向くと照れ笑いで返すガーナの人達。

私が JICA で働く理由を思い返させてくれる瞬間です。

新宿にある JICA 本部での私たちの仕事は、言ってみればその国の協力隊事業に関する情報を伝えて「人をつなぐ」こと。一般の方や派遣前の隊員にその国での協力方針や現地の様子をお話したり、いい活動をしたボランティアを取り上げて帰国後も広報に協力してもらったり、自分で分からないことがあれば知っている人を探して紹介したり。また、「この国のために、ボランティアの派遣を通してこんなことをしていきたい」というメッセージ発信を内部に向けて行うのも重要なタスクです。その情報収集の一環として、本部で一番最初に報告書に目を通すのも私たち。二年間で5回提出される報告書はやはり書いたその人を

よく表していて、百人いれば百様、一人一人の個性が文面から感じられます。課題や地域の最新情報を伝える有用ツールとして今後も多くの人に愛読されていくことでしょう。

社会人採用枠で JICA に転職し、以来3年間、ずっとボランティア事業に携わってきました。転職前には途上国から来日する JICA 研修員向けの研修内容を企画していたのですが、彼らのひたむきな姿勢に心打たれる一方で、「ここに来ることが出来たのは幸運なほんの一握りの人たち。いつか本当に途上国に行って、世界の現実を自分の目で見て、考え、なにか貢献できたら」・・・それが転職の動機でした。これまで、自分の経験のなさを悔やんで、「こうしたらもっと良い結果を引き出すことが出来たのに」と嘆くことはあっても、JICA に転職したことを後悔したことは一度もありません。国内外を問わず多くの魅力的な人たちに会い、刺激を受け続けていける JICA で、私も周りの皆さんになにかお返しが出来るような、そんな存在を目指していきたいです。

最後になりましたが、エイズ対策担当だった頃に私が選考に関わった初めの隊次（17 年度 2 次隊）がまもなく帰国で、こうして選考から帰国まで見守ってくることが出来たことと、隊員派遣 30 周年というこの節目の年にガーナ担当として立ち会えたことを、大変光栄だとしみじみ感じています。

長文にお付き合い頂き、ありがとうございました。

イメージ写真：エルミナ城から見た風景

－ **事務所関係者編** －

「ガーナで見つけた小さな幸せ」

JICA ガーナ事務所長
村上博

何時の頃からか任国での感動する心が薄れてしまったのに気が付き、出来るだけ30数年前のマラウイへの隊員としての赴任時の感動を思い出し、「初心に帰れ！初心に帰れ！」と念じている今日この頃。感動がないということは、物事に興味を抱いてしっかり見ないこと。そう考えると、逆に物事をより詳細に見る努力をすることにより、新たな発見があり、感動することにつながるのかも知れません。

感動と言えば、このように鈍感になってしまったにも関わらず、大いに感動した出来事がありました。2006年3月29日の皆既日食です。少しずつ欠けて行く太陽を、いつもの冷めた気持ちでボーっと眺めていた私ですが、完全に欠けた瞬間、太陽のコロナが金環食として丸い環となり、星が現れ、地上は薄暗く、この世のものとは思えず、何かゾクゾクとした気持ちになりました。因みにこの日は私の57回目の誕生日！もうこれで充分生きたと言う気になりました。今の気持ち？もう少し楽しむために生きたいです！

イメージ写真：皆既日食

テーマから外れてしまいましたが、私のガーナで見つけた小さな幸せは、他の任国では遭遇してしまった大きな事故、事件、病気が、こちらに赴任後、これまで起きていないことです。ありがたいことで、これだけで小さな、いや大きな幸せを感じています。

「30 年の重み」

JICAガーナ事務所次長
熊谷真人

30 年前はどんな年だったのでしょうか。
…カーター大統領就任。ロッキード事件。大学入試センター発足。有珠山噴火。王選手 756 号。日航機ハイジャック事件。TV 白黒放送終了。巨人と阪急。輪島と北の湖。エーゲ海に捧ぐ。勝手にしやがれ渚のシンドバッド。暑中お見舞い申し上げます津軽海峡冬景色。秋桜失恋レストラン。迷い道あずさ2号。冬が来る前に酒と泪と男と女。青春時代愛のメモリー。幸福の黄色いハンカチドリフ大爆笑。猫ひろしと氷川きよしが生まれた年。

今ガーナにいるほとんどの隊員の皆さんにとっては、皆さんが生まれる前か、生まれたころの話ではないかと思います。

仕事でガーナの役所や警察を訪れると、「小っちゃいとき JOCV のセンセに習ろうたで。」と言ってくれる人が結構います。

「そうですか。で、何がよかったですか。」
「礼儀正しゅうて、時間を守るっちゅうことが印象に残ってまんな。」
「ああ、それは日本人の基本ですからね。」
「そらもう、ワシらええ勉強になりましたわ。ガーナ人みんな見習うべきや思いましたわ。」
「はいはい。うれしいことですね。」
「かなわんな一嘘や思うてはんのかいな。ワシほんまにそない思うてまんねんで。」
「そう仰っていただけることが私の幸せです。」
「そやったらコンピューターちょうだい。今めっちゃ欲しいねんけど。」
「・・・」

ガーナに来て最初のころは、この「くれくれ攻撃」に閉口し、「彼らに向上心や羞恥心はないのか」、「だからいつまでも自立できないんだ」と、言われる度に腹を立てていましたが、最近では、「彼らは半ば会話を楽しんでいるのだ」ということがわかり、最後はいつも笑って握手して席を辞しています。

こういう会話を楽しめるようになったこと、随分と心に余裕ができたなあと自分でも驚いています。協力隊の皆さんは、きっともっと多くの経験を積んで、ひと回りもふた回りも大きくなってガーナを後にするんだろうなと思います。そんな皆さんから話を聞けることが、ガーナにいる私の幸せです。

「ボランティア調整員の幸せ」

JICAガーナ事務所ボランティア調整員
鷲見美由紀

ガーナに住んで丸２年経ちました。
いまだに
ぷんぷん、いらいら、することも多いです。

でも、
日本から遠く離れた気候もぜんぜん違う土地なのに
なんだか地元の風景と良く似た風景を見つけたり、
訪問先の生徒が「今日の記念に」と言って
ちょっとした手芸品を作ってくれたり、
２回目に出張先で泊まったホテルの人が
「また来てくれたのね、うれしいわ」と言ってくれたり、
車がパンクして困っていたら、気がつけば
何か手伝ってくれようとする人たちで人だかりになっていたり、
となりの食堂のお持ち帰り弁当の中身が、
ときどきしか注文どおりにならなかったり、
仏頂面して座っていた店員のお姉さんに笑ってあいさつしたら
ものすごくいい笑顔であいさつし返してくれたり、
ぜんぜんレパートリーが増えない現地語レベルの私に
毎日現地語で話しかけてくれたり、
トラブルに遭ってまゆが八の字になっている私に
「心配ないよ！」「リラックスして！」と声をかけてくれたり、
タクシーの運転手に自分のうちまでの道順を説明したら
「わかったわかった」と JOCV ドミトリーに連れて行かれたり、
ほわん、と忘れた頃に日本から季節の便りが届いたり、

そんなガーナ生活や私の周りの人たちに
「愛着」以上の何かを感じるようになった自分を発見するときが
なんだかしあわせです

そして
最後に「ガーナに来てよかった」と言って
充実感と嬉しさと寂しさの入り混じった表情で
空港に向かっていく皆さんの笑顔を見るときが
一番しあわせです

「素直に思うコト」

JICAガーナ事務所広報エージェント
木村真樹子

ガーナに来てから、書ききれないほど様々な瞬間・出来事に対して「幸せ」を感じてきましたが、
そんな風に「幸せ」と素直に思えることが、私にとっての「幸せ」です。

「1000 人のサポーター」

JICAガーナ事務所広報エージェント
工藤美穂

ガーナ人と日本人のハーフである息子達の将来について、「このままガーナで暮らし、ガーナ人として生きていくのか、この先日本で暮らし、日本人として生きていくのか、どちらが幸せなのか」といつも考えてしまいます。人格形成を考えると、のびのびとガーナで育てたいと思うし、学力を考えるとやはり日本がいいかな、と思います。

日本の学校でも、もし担任の先生が協力隊 OB/OG だったら、きっと肌の色や国籍の違いに偏見のない明るいクラスだろうなぁ、そんな学校があったら理想なだぁと思います。

日本中の、学校や、病院や、社会の色んなところに協力隊 OB/OG の人がいたら、我息子をはじめ外国人が、もっともっと日本社会で理解され、受け入れられそうな気がします。
ガーナ隊員は来年で累計約 1000 人。少なくともガニアン・ホスピタリティーを胸にしみこませた日本人が 1000 人もいるのだ、と思うと、なんだか心強いです。

イメージ写真：タマレで行われたホリデースクールに集まる JOCV と学生たち

「30 周年記念文集あとがき」

皆さん、本文集を読まれた感想はいかがでしたでしょうか？この文集を読み返してみると、30 年近くも前に日本で流行ったゴダイゴの曲の一節が自然と浮かんできます。

『僕らは生きる大切なもの、ここで見つけて残したい、生きる力が溢れている。』
『僕らは何をなくし、そして何を手にした、どちらがいいのか？Return, return, return, return to Africa…アフリカに帰れよ、生きる道を探すんだ。』[31]

日本では、現在、物が溢れ、大抵のものは何でも手に入る状態にあります。他方で、ガーナを始めとするアフリカには、まだまだ水も電気もなく、明日の食べ物のことを憂いている人たちがたくさん暮らしています。しかし、ここガーナで暮らしてみると、人々が素敵な笑顔で、他人を思いやりながら、たくましく生きている姿に、しばし「開発とは何か？国際協力とは何か？」と考えさせられることがあります。もし人間の幸福度を測るものさしがあったら、ガーナ人の平均の方が日本人の平均より高いかもしれません。

昔、マズローという学者が欲求5段階説という、人のモチベーションの仕組みを説明する理論を唱えました。人は、「食欲や性欲、睡眠などの生理的な欲求」が満たされると、次の欲求である「衣や住に関わる安全欲求」が芽生え、それが満たされると「所属や友人を求める社会的な欲求」を求めて行動をする。最後には、「自らが他よりも優れていたいとする自尊の欲求」を経て、自分の夢を追い続ける「自己実現の欲求」段階に至るという説です。マズローによると、この最後の欲求は永遠に満たされることがないそうです。日本人の多くは、もう既に低位にある欲求が満たされ、満足できることのない「自己実現の欲求」を求め続けている状況にあるのかもしれません。

アフリカでは、低位の欲求である「衣・食・住」さえ満たされていない人たちが暮らしていますが、彼らが生き生きと輝いて見えるのは何故でしょうか？それは、「食べ物を口にできない日もあるが、美味しいものを口にした時の感動はひとしおである」「昨日は、電気は来なかったが、今日は電気が来て、ホッとした」といった、「衣・食・住」の有難みを実感できる環境にあるからなのかもしれません。人間は、贅沢なこと、便利なことにはすぐ慣れ、そのありがたみを忘れてしまいがちです。しかし、ここアフリカには、何十年も前に日本人が忘れてしまった素朴な幸せが未だたくさん残っているのではないでしょうか？

「国際協力」の「協力」は、お互いが力を合わせて、ある目標に進んでいくことを意味します。これからの国際協力は、双方向の協力として、日本と途上国の人たちが本当に幸せな人間のあり方を求めて、知恵を出し合っていくべきではないでしょうか？この文集を通して、少しでも多くの日本の方々が、忘れてしまった素朴な幸せについて考え、本当の幸せとは何かについて再考するきっかけ作りとなれば幸いです。

最後に、この文集に原稿をお寄せくださった協力隊員、OB・OGの方々、貴重な体験を進んでまとめて下さり、ありがとうございました。今後、皆様方がガーナで見つけた幸せを心の糧に、日本のため、世界のために益々ご活躍されることを JICA ガーナ事務所スタッフ一同祈念しております。

[31] ゴダイゴ 「RETURN TO AFRICA」（作詞：山上路夫／奈良橋陽子、作曲：タケカワユキヒデ）より引用

「ガーナ国協力隊事業の概要 （青年海外協力隊20世紀の軌跡より引用）」

（１）　ガーナ協力隊派遣のはじまり

ガーナへの協力隊隊員派遣は、1975年に当時の木村外務大臣がガーナを訪問したことで派遣協定の交渉が一気に進展し、1977年2月に首都アクラで派遣協定が締結された。同年8月に、52年度1次隊として9名の隊員がガーナの地に着いたことから、ガーナへの協力隊事業が始まった。52年度1次隊9名の内訳は、理数科教師7名、稲作1名、野菜1名であった。1998年2月に、隊員15名が大統領を表敬した。2008 年には、隊員派遣数累計1000名を超える予定である。

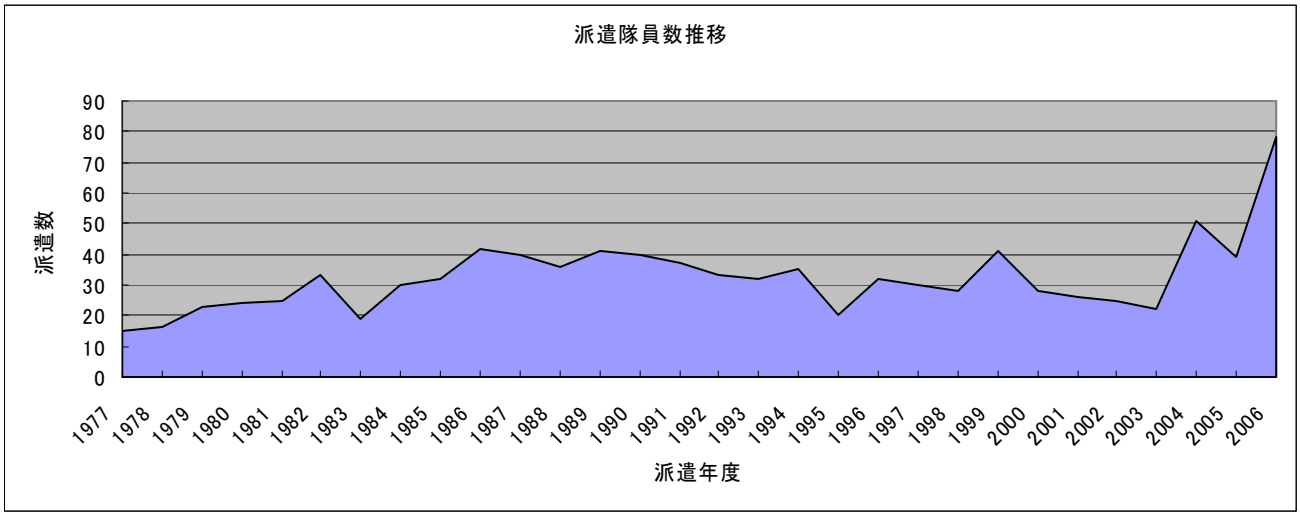


図1：派遣年度と派遣数（派遣隊員推移）

（２）　ガーナ　国協力隊派遣実績

表１の派遣実績から、ガーナ派遣隊員の主要分野は、①教育・スポーツ分野、②職業訓練分野（保守加工、服飾、観光等）、③農業関連、④保健・衛生・福祉であるといえる。特に、教育に関しては、第一陣到着時から、現在も継続して支援している。理数科教師に関しては、これまでの累計は300名を越している。さまざまな職種が派遣されてきた。数にして約80近くもある。現在では、エイズ対策隊員が18名活動する等、保健分野の隊員の活動も活発に行われている。

派遣分野	派遣数累計
教育・スポーツ	372
保守加工	232
観光・服飾・ハンドクラフト	109
農業・漁業・水・養蜂等	88
保健・衛生・福祉	81
青少年・村落開発	49
その他	42
総計	973

表1：派遣分野と派遣累計

編集・発行： 独立行政法人 国際協力機構 ガーナ事務所
JICA Ghana Office

4th Floor, Millennium Heights Build. Airport Commercial Area, Accra, Ghana
P.O. Box 6402 Accra-North, Ghana
Tel. ＋233（市外局番 021）774903, 771354, 766080, 760781
Fax +233（市外局番 021） 760954
ホームページ：
【JICA Ghana Office 日本語】http://www.jica.go.jp/ghana/index.html
【JICA Ghana Office English】http://www.jica.go.jp/ghana/english/index.html
Ｅ－mail： gn_oso_rep@jica.go.jp

JICAガーナ事務所青年海外協力隊事業 30 周年記念文集制作チーム

工藤 美穂	総務・経理班（広報エージェント）
柏原 盛	総務・経理班
梁瀬 直樹	企画事業調整班（広報エージェント）
眞鍋 真	企画事業調整班（ボランティア調整員）
木村 真樹子	NGO-JICA JAPAN デスク（広報エージェント）
鷲見 美由紀	教育・産業振興班（ボランティア調整員）
庄子 てい子	元ガーナ事務所ボランティア調整員

ガーナ協力隊派遣 30 周年記念イラスト・ロゴマーク作成（表紙・裏表紙）
沢目 文雄（平成 18 年度 2 次隊） 職種：自動車整備
任地：ブロング・アハフォ州スンヤニ

＊ 是非、皆様のご感想やコメント等を当事務所へお寄せください。

なお、本文集の著作権は独立行政法人国際協力機構または正当な権利を有する第三者に帰属しています。記載されている内容の一部でも、許可なく転載することはできません。

平成18年度2次隊　沢目文雄隊員　作

JICA
For a better tomorrow for all.
Japan International Cooperation Agency